



人面形伊弉土鏡（大高山城跡）撮影：小川治博

私は永遠の眠りから覚めたのだ

佐久の遺跡

佐久考古通信 No.99・100記念号

八ヶ岳、浅間、そしてその合間にねうように流れる千曲川。
美しい自然が織りなす佐久の大地には、2050もの遺跡が残された。
旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良平安、中世、移りゆく時代の中で、
どのような人々の営みがあったのか。最新の発掘成果
から解きおこされる文化史、モノが語る人々の豊かな世界観。

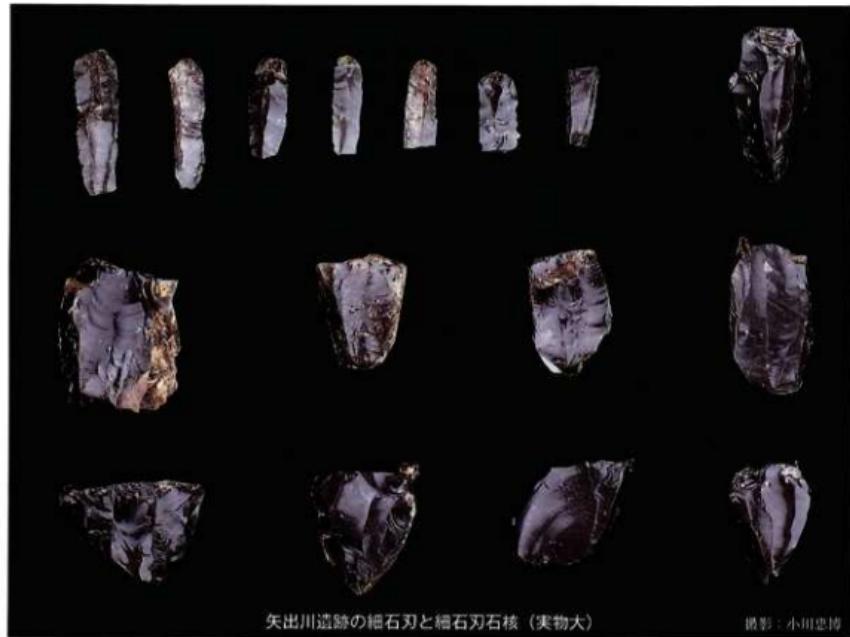
佐久考古学会

佐久の遺跡

佐久考古通信 No.99・100記念号



佐久考古学会



矢出川遺跡の細石刃と細石刃石核（実物大）

撮影：小川忠博

やでがわ 矢出川遺跡（南牧村）

日本で初めて細石刃文化が発見されたことで知られる矢出川遺跡は、標高1,340m、八ヶ岳の南麓に広がる南牧村野辺山高原の一角にあり、国史跡となっている。

「岩宿の発見」から4年後の1953年12月末、吹雪の矢出川で、気鋭の考古学者芹沢長介と岡本勇、地元研究者の由井茂也の3人によって、小さな石器が発見された。しかし凍っていてよくわからない。仕方なく芹沢は暖かい液体を注ぎかけた。氷が解け現れたのは、細石刃と呼ばれるカミソリの刃のような小形石器とそれを剥がしたウズラの卵ほどの細石刃石核で、日本にも細石刃文化が存在したこと証明した瞬間であった。

後期旧石器文化の最終末にあたる細石刃文化は、本州では14,000年前頃に位置付けられる。カミソリのような細石刃は、連続して軸に埋め込まれ、槍先などに用いられたらしい。矢出川では5,000点を超す細石刃と600点を超す細石刃石核が今日までに発見されており、その量は日本の遺跡のトップ3に入る。

矢出川の細石刃に用いられた黒曜石は、近隣の八ヶ岳や和田岬のものであったが、はるか太平洋沖の神

津島産の黒曜石も3分の1ほどみられた（写真最右列3点）。当時は水河時代で海面低下が著しかったとはいえ、神津島へは舟でないと渡れない。近くに和田岬などの優良な黒曜石原産地がありながら、なぜ、神津島の黒曜石がはるばる海を渡り、総計200kmあまりの距離を越えて八ヶ岳のふもとまで運ばれてきたのか。この大きな謎は、今日解決されないままである。

矢出川に最初の点が落とされてから、半世紀をへた今日、北は北海道の豊別A遺跡から、南は鹿児島の錢龟遺跡まで、1,792か所の細石刃遺跡が日本列島において確認されている。

（堤 隆）



原野の野辺山原と八ヶ岳（昭和28年）



栃原岩陰遺跡の骨角器

撮影 小川忠博

とちばらいわかげ 栃原岩陰遺跡（北相木村）

栃原岩陰遺跡は、北相木村の相木川右岸に位置する小さな岩塗地形で、1965年の奥水利雄・新村薰両氏の遺物発見以来、信州大学が中心となり十数年に及ぶ調査が進められてきた。

この一連の調査では、縄文時代草創期から早期を中心には多くの遺物が確認された。特に重要なのは通常の遺跡では見られない有機質遺物が多量に出土した事である。まず幼児のものを含む人骨が約12体分。また獣骨の量は膨大で、イノシシ・シカはもちろん、カモシカ、ニホンザル、ツキノワグマなどの大型哺乳類、キツネ、タヌキ、テンなどの中・小型哺乳類、その他鳥類、魚類（サケ・マス類）、他にも食用と思われるカワシンジュガイや木の実が出土している。骨角器としては刺突具の優品はじめ、釣針や縫針等、さらに装身具ではタカラガイなど海生の貝の製品もある。

石器は黒曜石製の石器やスクレイパー類が多い。土器では草創期末の多縄文系土器（主に表裏縄文土器）や、早期前半の押型文系土器が主体となる。さらにこれらの土器が層位順に出土したこと、この時期の土器編

年の重要な資料となった。これは同時に、他の遺物の帰属時期をも示していると言え、道具の組み合わせや狩猟対象の変化などを考えていくことが出来るだろう。

昭和62年には国史跡に指定されたが、この時遺跡に含められた隣接する天狗岩岩陰部では、平成11年度の調査で縄文時代前期・中期・晚期、古代・中世、そして近世の遺物が確認された。

遺物は北相木村考古博物館に展示・収蔵され、現地も見学が可能である。小海駅からは村営バス又はタクシーとなる。遺跡と博物館は約4kmの距離があるので、足の確保はしておきたい。

(藤森英二)



栃原岩陰遺跡 全点写真提供：北相木村考古博物館



北沢の大石棒
撮影：小川忠博

きたざわ おおせきぼう 北沢の大石棒（佐久穂町）

千曲川左岸、八ヶ岳のすそ野がゆるやかに延びる地域である佐久穂町高野町付近。ここを西に向かって流れる北沢川周辺には、現在水田が広がっている。そしてこの場所にはひときわ人目を引く石柱がそびえ立つ。地上部だけで180cmという大きさだ。

縄文時代中期から後期には石で作った男根状の石棒と呼ばれる遺物がしばしば見られるが、佐久地域にもその数は多い。佐久市白田の諏訪神社には、月夜平遺跡から発見された152cmの後期の石棒も残されている。これも巨大な例だが、北沢の大石棒はさらに上をいき、おそらく日本一という長さであろう。

大正末年、北沢川の改修工事の際に、この石棒は発見されたが、高見沢伊重氏がご自分の田んぼの畦に立て保存してきたものである。その後昭和57年、佐久町（当時）の文化財に指定する際、細かな観察が行われている。これによると全長は223cm、直径は約25cm。全体がしっかりと敲打されていた。その形状や技法は確かに縄文時代中期の石棒であると言えよう。

但し隣接する北沢遺跡や、大きな集落跡と考えられ

る佐久西小学校裏遺跡とのかかわりは不明瞭である。いざれかの集落の遺物なのか、あるいはその無二の巨大さは、もっと広い範囲での折りのシンボルだったことを示しているのだろうか。

佐久に石棒が多く見られる理由として、佐久市東部の山地一帯にある柱状節理の志賀凝灰岩や、比較的近距離の秩父地方の練泥片岩がその材料となるからとも言われている。やはり石棒の材料となる溶結凝灰岩の路頭に近い岐阜県塩屋金精神社遺跡では多量の石棒を作製していたことが知られているが、当地域でもそのような製作場の発見が将来あるだろうか。（藤森英二）



大石棒頭部



川原田遺跡の焼町土器

撮影：小川忠博

かわらだ 川原田遺跡 (御代田町)

縄文王国と異名をとるのは、尖石や井戸尻などのある八ヶ岳西南麓であるが、浅間山麓もなかなかどうして負けず劣らず縄文遺跡の宝庫である。郷土遺跡、石神遺跡、そして川原田遺跡がある。

川原田は、日々噴煙が途切ることのない活火山浅間山の南麓、標高870mにある。その西麓には、古刹真乗寺とその境内を潤す大沼の池がみえるが、この標高一帯には多くの湧水地点があり、それに沿うように縄文のムラが構えられたのだろう。

川原田遺跡の発掘調査は1991年に行われ、縄文前期の住居跡6軒、縄文中期の住居跡46軒のほか、平安の集落などが発見されている。

川原田遺跡を一躍全国区にしたのは、なんといっても焼町土器の出土である。

焼町土器は、メガネ状の把手と曲線、刺突などを文様に持った中期縄文土器である。焼町をもつ川原田遺跡12号住居の炭化材の放射性炭素年代によれば、 4680 ± 110 年前（未校正）という年代が出ていている。

焼町土器は、塩尻市焼町遺跡で最初に発見されたこ

とでこの名がついたが、その後まとまった出土例がみられない状況が続いていた。そうした中で、川原田遺跡からの多量の出土が大きな注目を浴び、その型式学的な理解を大きく前進させた。どうやらその分布は、浅間山麓から群馬地域が中心となるらしい。

学問的な重要性もさることながら、川原田の焼町土器は、その造形的な独創性で他の縄文土器の追従をゆるさない。いわば火炎土器とともに日本列島を代表する縄文土器であることから、平成11年国重要文化財に指定された。現在、御代田町浅間縄文ミュージアムで常設展示されている。

(堀 隆)



焼町土器の出土住居 写真提供：浅間縄文ミュージアム



社宮司遺跡の装飾品

伴野種一郎氏蔵 撮影：小川忠博

しゃぐうじ 社宮司遺跡 (佐久市)

真っ赤な鉄石英の管玉、深緑の碧玉の管玉、白銅製のペンダント、鮮やかなグリーンの勾玉、佐久市社宮司遺跡の装飾品の美しさからはため息が漏れる。遙か過去の時代にあっては、相當に貴重な財物であったに違いない。

千曲川左岸の標高682mの沖積扇高地で、佐久市の野沢南高校の東にある、社宮司地蔵からこれらのアクセサリー類が出土したのは、ゴボウ掘り折りの昭和27年のことであった。発見者は耕作者の伴野種一郎氏夫人である。

出土したのは、白銅製ペンダント1、ヒスイ製勾玉1、鉄石英製管玉15点、碧玉製管玉10点、板状鉄斧1で、弥生土器底部とともに見つかった。その後、佐久市志福墓に際してこの地点の再調査がなされたが、遺構等は確認されなかった。

これらアクセサリー類は、墓などに副葬されたものなのだろうか。また、これらの財物を所持していたのは、当時の佐久地方において、どのような社会的位置にあった人物だったのだろうか。興味は尽きないところである。

白銅製ペンダントは長さ4.2cm、朝鮮半島製の多錠細文鏡の破片を涙滴形に再加工したものであり、国内でも稀少例である。勾玉は4.6cm、管玉は1cmから3cm程度の長さのものである。

土器は底部の無文部のみであり、その時間的位相付けて決定打を欠くが、弥生中期末から後期にかけてのものとみてよいだろう。

なお、多錠細文鏡の錠とは、鏡の裏の紐を通すための穴が開いた突起をさし、通常中央に1個だけだが、多錠細文鏡では2～3個の錠があることから「多錠」と呼ばれる。

また「細文」は、何千、何万本とも知れない細い線の文様を示す。この鏡は、細い線を描くことが可能な土の鋳型で製作されたと考えられ、他の鏡の表が凸面に対し、四面であること大きな特徴のひとつである。多錠細文鏡は、朝鮮半島と日本の遺跡で発見される青銅の鏡で、朝鮮半島で29面、日本では福岡、佐賀、山口で6面、大阪、奈良、長野で3面の計9面が出土しているのみである。

遺物は個人蔵で、通常は公開されていないが、当学会主催の企画展「佐久の古代展」などで、浅間繩文ミュージアムを会場として展示される場合がある。

(堤 隆)

 旧石器
縄文
弥生
古墳
秦漢平安
中世

土偶形容器 草薙和幸氏蔵 撮影・小川忠博



たて 館 遺跡 (佐久穂町)

遺跡名を聞いて「おや！」と思う。館遺跡の館とは、中世においてこの地に構築された城館に由来がある。

遺跡は抜井川が千曲川に合流する佐久穂町海瀬集落周辺に近い標高830m内外の段丘状に立地する。中世当時のこの地は、滋野党と言われる根井大弥太親一族が支配しており、軍馬を育成して強力な武士団をつくるために私牧を経営していた。幸親の子備六郎は館遺跡周辺一帯に私牧を開き、抜井川の段丘上に城館を築いた。遺跡の名は、これに因んだものであろう。

館遺跡ではここに紹介する土器をはじめ、弥生時代中期前半、佐久地域においては弥生時代の開始にあたる時期の土器（写真下）が出土している。佐久の弥生時代開始期の遺跡は他に南牧村矢出川南遺跡、佐久穂町中原遺跡、佐久市（旧白田町）月夜平遺跡などの南佐久地方の山間部に多く見られる反面、佐久市町田遺跡のように千曲川の氾濫原にも存在していた。このことは、氾濫原での水田經營を試行しつつも、なお、山間部での採集・狩猟に生活の糧を求めていた当時の時代性を現していると考えられる。

写真の遺物は、土偶の形状をした容器である。リング煙になっている緩傾斜の台地から発見された。男性像とみられ、ややつり上がった小さめの目、小さいが彫の深い鼻立ち、小さな口、額・頬には刺青（タトゥー）が表現され、両耳には二つずつピアスと考えられる孔が穿たれている。当時の倭人の表情を探る貴重な造形である。神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡発見の同類の土器内には幼児の歯・骨片が入っていたことから、同様の土器は納骨用であった可能性が高いと考えられている。県内での類例は上田市（旧丸子町）腰越の淵の上遺跡にある。
(小山岳夫)



弥生中期の土器



東一本柳古墳の金銅製馬具

写真提供：佐久市

ひがしいっぽんやなぎ

東一本柳古墳 (佐久市)

東一本柳古墳は、佐久市岩村田にある。古墳は湯川を臨む台地の縁辺に立地するが、現在は残念ながら消滅している。

本古墳は昭和46年に宅地造成に伴い發掘調査が行われた。その結果、古墳は径10mほどの円墳で、南開口の横穴式石室であることがわかった。

この石室はいわゆる両袖式の横穴式石室で玄門部に立柱石を立て袖とし、奥壁と側壁は石の最大面を壁面として利用するものであり、佐久平では7世紀の後半に盛行した石室の形態である。

このようにごく一般的な後期の小古墳が注目を集めたのは、その出土遺物の華麗さからである。石室内は2面の棺が納められた面があり、下の第2棺床と呼ばれる面からは馬具・鉄鎌・刀装具・刀子・耳環・玉類が出土した。

中でも馬具類の中には、出土例が希少な長柄円形鏡板付きの帶や、写真に示した毛彫りの金銅製杏葉、同じく毛彫りの円形飾金具や蛇尾などがある。特に金銅製杏葉は杏葉本体が金具部と蝶番により連結されて

おり、このように完形での発見事例は非常に希少である。なお、これらの金銅製の金具類には裏面に皮の残っているものも存在する。

これら馬具の優品が一地方のごく一般的な小古墳に副葬されている事は、驚愕に値する事実である。この出土品は古墳時代後期に佐久平が担った地域的な特質を如実に示す一つの資料であろう。

出土品は佐久市指定文化財となり、事前に連絡すれば佐久市教育委員会文化財課(☎0267-68-7321)で見学することができる。

(富沢一明)



東一本柳古墳石室

旧石器

縄文

弥生

古墳

奈良・平安

中世

御牧ヶ原の梵鐘
写真提供：鹿沼草治



御牧ヶ原出土 梵鐘 (佐久市)

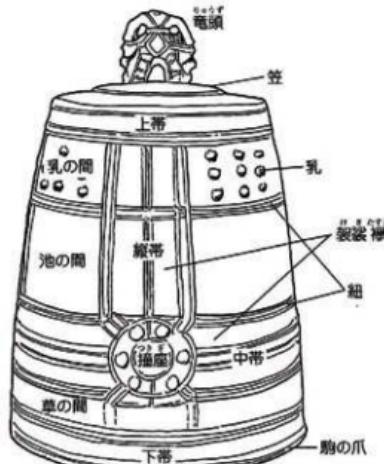
昭和初年、御牧ヶ原台地の一角、旧浅科村蓬田から鉄製の梵鐘が発見された。戦後、この鐘を実見した梵鐘研究家で坪井清足氏の父である坪井良平氏によると、銘はないもののその型式から、従来信濃最古とされていた松原湖畔の弘安2年(1279)銘の「野ざらしの鐘」よりもさらに古く、最古の梵鐘であるという。

また、信濃最古であるばかりか、東国では、千葉県から出土した宝龟5年(774)年肥前國銘の最古の梵鐘に次ぐ古さのもので、いずれにせよ平安前期のものとみてよい。

鉄鍾は、小形品で、総高43.4cm、竜頭高7.5cm、肩以下の高さ34.4cm、口径31.5cm、撞座中心の高さ10.8cmである。

竜頭は撞座と直交する古式のもので、周囲は袈裟襷を設けて4区に分ける。乳は、半球状のものを3段3列に配する。撞座は表裏に2箇所あり、大型簡素な六葉素卉をなす。駒の爪は、小さい。

本梵鐘は、昭和52年、国重要文化財に指定されている。佐久市の畠山家に保管されている。(堤 隆)



御牧ヶ原梵鐘の見取り図と名称

ようこそ 佐久の遺跡へ

浅間山

切り立った稜線をみせる八ヶ岳、白煙を東になびかせる浅間山、その間を滔々と流れる千曲川、こうした豊かな自然環境が佐久の大地をはぐくんでいます。この佐久の大地に、原始・古代から中世まで、ざっとみて2,050もの遺跡が残されたことがわかっています。

信州中央高地の一角を占める佐久の地に、人々が居住したのは、はるか旧石器時代の3万年以上前のことでした。当時は、氷河時代、今よりずっと寒冷化していた時代です。いったいなぜ、この地に人々はやってきたのでしょうか。それは彼らの生命線を担った黒いダイヤ＝黒曜石という資源が、麦草峠をはじめ、近隣の和田峠などにあったからでしょう。また、動物相にも恵まれていたのかもしれません。

黒曜石という資源は、縄文時代になっても、その有用性は変わりませんでした。温暖化した現在の完新世において縄文の人々は、植物の恵みを享受しました。不安定な旧石器的移動生活から、定住生活へとライフスタイルが変わり、多くのムラが佐久地方に作られました。

弥生時代にあっても人々はこの地を去ることはありませんでした。しかし、稻作という新しい生業を受け入れなければなりません。佐久という高冷地にあって、稻作を根付かせるには相当な努力が必要だったはずですが、その生産基盤である水田ができるのは、佐久の盆地部のみでした。したがって必然的に集落もまた盆地部を中心に作られます。狩猟採集社会の山棲みから、ムラが盆地へと下ってきたわけです。集落は、続く古墳時代、奈良時

代と盆地部中心に作られてゆきます。

古墳時代以降、政治的な動向から眼がはなせませんが、國家の東国支配にあって佐久は、交通の要となっていました。関東から見れば、善光寺平への足がかりであり、信濃からは関東への玄関口である「碓氷」という絆路でもありました。そこには活火山浅間山がランドマークとしてそびえています。古東山道や令制東山道は、碓氷坂を越し、政治や文化、そして物資を往来させました。

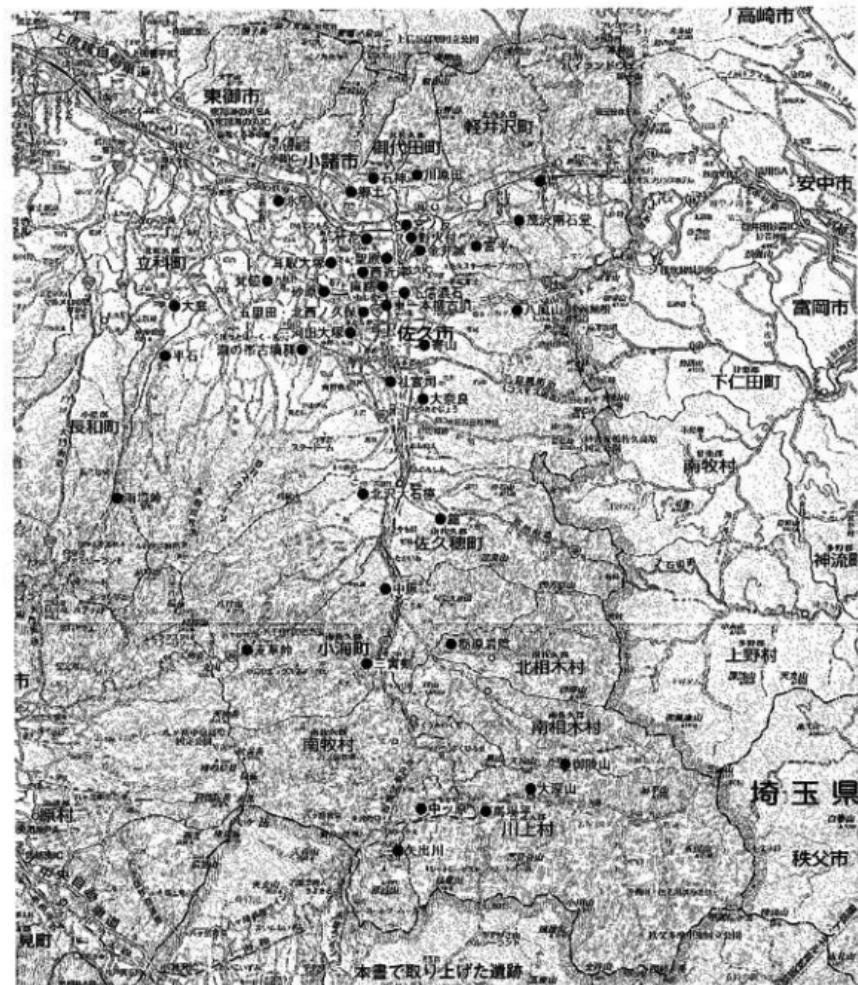
また、佐久は古墳時代より一大馬産地で、名馬の養育高い「望月の駒」も佐久の大地が育みました。

中世には、佐久は武田信玄の攻略を受けます。多くの人々が殺され、婦女子は連れ去られたとも伝えられますが、それでも人々は力づよく生きてきました。

さて、佐久考古学会では、昭和50年（1975）より連絡誌『佐久考古通信』を毎年3～4号ずつ発刊してきました。B5版12頁立ての小さな連絡誌も、32年かかって100号を迎えることができました。本号はそれを記念し、佐久を代表する遺跡を取り上げました。ただ、この小冊子で紹介できる遺跡はそのごく一部で、重要ながら洩れた遺跡も多くあることをご了承ください。貴重なお写真を提供された関係各位に深く感謝いたします。

執筆は、佐久考古学会の中堅会員が行っています。一般の方々にもわかりやすいよう、平易な記述に努めました。これらの遺跡の中から、佐久の歴史の息吹を感じ取っていただけたと幸いです。

佐久考古学会会長 藤沢平治



例　言

- 1執筆者については、その氏名を文末に記した。
- 2資料提供者・所蔵者氏名は、本文中に明記した。
- 3写真撮影者は、写真下に明示した。
- 4紙数の関係上、参考文献は省略させていただいた。

もくじ

| | | | |
|------------|----|------------|----|
| 巻頭図版 | 1 | 弥生時代の遺跡 | 28 |
| ようこそ佐久の遺跡へ | 9 | 古墳時代の遺跡 | 32 |
| 時代概説 | 11 | 奈良・平安時代の遺跡 | 38 |
| 旧石器時代の遺跡 | 14 | 中世の遺跡 | 45 |
| 縄文時代の遺跡 | 18 | 博物館ガイド | 48 |

佐久の旧石器時代

後期旧石器時代は、およそ3万5000年前から1万5000年前までの2万年間続いた狩猟採集経済の時代である。

この時代の開始当初にあたる立科F遺跡が、佐久市東立科において発掘されている。また、麦草村の黒曜石も後期旧石器時代初頭の遺跡でしばしば産地同定されることから、麦草の黒曜石資源の開拓も後期旧石器時代初頭段階で既になされていたことがわかる。

後期旧石器時代は、2万5000年前を境に前半と後半に分かれるが、前半の遺跡は立科F遺跡のほかには、佐久市八風山II遺跡が発見されているくらいである。

これに対し、2万5000年前以降の後半には、遺跡が急増する。その主要な生活の舞台は、野辺山や川上など高原地帯であったようだ。弥生時代以降、盆地部が主な生活の舞台となるのとは正反対である。

後半には、ナイフ形石器・尖頭器・細石刃の順で狩猟具の変遷が見られる。

ナイフ形石器の遺跡は、川上村二沢遺跡などで発掘されている。尖頭器の遺跡は、川上村柏重遺跡や南牧村中ツ原遺跡がある。細石刃遺跡は、矢出川遺跡が著名である。矢出川に後出する中ツ原5Bや1G遺跡では、西南日本の矢出川技術とは異なる北方系、別個技術系の細石刃技術が用いられており、この地が、東西の石器文化のクロスロードであったことを物語る。

ハゲ岳に対し、浅間は後期旧石器時代に相当する時期に大規模な噴火を起こし、その分厚い堆積物に覆われた佐久市北部から小諸・御代田・軽井沢地域では旧石器遺跡は確認されていない。(堤 隆)

佐久の縄文時代

1万数千年前の土器登場から、約1万年前までを草創期と呼ぶ。佐久市八風山付近の黒色安山岩を使った大型石槍製作跡は、旧石器と縄文の端境期にある。草創期の末には、北相木村鶴原岩陰で土器や石器、人骨、骨角器などが多量に出土、早期前半まで及ぶ。

早期(約1万～6000年前)から前期の前半(約5500年前)では、浅間山麓の塙野西遺跡群における近年の発掘成果が大きい。ここからは堅穴住居とともに土器も豊富に出土し、前期前半の「塙田式」など独自の土器型式も認知される。前期後半では、今のところ発見遺跡例は多くないが、小海町中原遺跡は注目される。

県内で最も遺跡数が多いのが中期(約5000～4000年前)で、佐久でも遺跡数は急増する。川上村大澤山遺跡などは著名だが、近年では佐久市寄山・大奈良、御代田町川原田、小諸市郷上遺跡などでも大規模な集落跡が確認された。また当地域では敷石住居が中期後半から多出し、次の後期に引き継がれる例が多いのは特筆に値する。さらに土器研究も進み、焼町土器や佐久糸土器など、独自の機能が固まりつつある。

後期(約4000～3000年前)は、県内で遺跡数が激減するが、佐久ではその減少が比較的緩やかなようで、加えて先に記した敷石住居址や、土偶や石棒等この時期の特殊な遺物の報告が多い。また石棺墓を伴った環状の配石遺構をもつ蛭井沢町茂沢南石堂遺跡なども著名である。

弥生時代の直前に向かうが、晩期の遺跡は多くない。その中で小諸市水瀬遺跡の存在は注目される。

(藤森英二)

旧石器

縄文

| 後期旧石器時代 | | 縄文時代 | | | | | | |
|---------|-------------|-----------|-------------|----------|--------------------|----------|----------|---------|
| 前半 | 後半 | 草創期 | 早期 | 前期 | 中期 | 後期 | 晩期 | |
| 三万五千年前 | 一八〇〇〇年前 | 一四〇〇〇年前 | 一一〇〇〇年前 | 一〇〇〇〇年前 | 六〇〇〇年前 | 五〇〇〇年前 | 四〇〇〇年前 | 三〇〇〇年前 |
| (水瀬の時代) | ナイフ形石器文化の発達 | 尖頭器文化が広まる | 細石器文化が広まる | 土器と弓矢の登場 | (水瀬期がかかる)(縄文化のピーク) | 食器の形成が進む | 大根掛遺跡 | 堅穴住居の盛行 |
| 立科F遺跡 | 八風山II遺跡 | 長野県遺跡群 | 八坂山遺跡・中ツ原遺跡 | 立石遺跡 | 織田遺跡 | 中根遺跡 | 川上村大澤山遺跡 | 水瀬・石井遺跡 |

佐久の弥生時代

佐久地方においては、弥生前期に相当する時期の集落等についてはほとんどわかつておらず、わずかに佐久市岩村田の下信濃石遺跡や佐久市野沢の東五里田遺跡で土器が発見されているのみである。

弥生中期前半は、発掘調査例が希少で既出資料が多い。佐久穂町中原遺跡の大型の壺や条痕文の壺や同町館遺跡の入面彩文土器などがあり、再葬墓の上器棺であろう。現在発掘中の佐久市片貝川沿いの遺跡では、弥生中期前半の土器が出土し、注目される。

佐久市の標高700m前後の千曲川との合流地点に近い河川の河岸段丘上にまず、弥生中期後半の集落が出現する。その後半には集落は広がり、湯川右岸の西一本柳・北西の久保、五里田、川原瀬、左岸の根々井芝宮、寄塚と遺跡数が増大、調査住居は200棟を越す。

「赤い土器」とされ、壺や高杯・鉢などの大半が赤色並彩されるのが弥生後期であるが、初頭の吉田式土器分布は、西一本柳遺跡などがあるがまだ少數である。遺跡数を拡大する後期中葉の箱清水式土器の住居は、段丘上や低地に臨む台地縁辺に進出し、ここに佐久市の岩村田・長土呂地区は、中期後半とはほぼ同じ数の住居が調査され、長土呂の近津遺跡群では長軸17mの隅九長方形の超大型堅穴住居が作られた。

ムラの生計を支える耕作は低地でなされた。佐久市平原の渦り遺跡では弥生の水田跡が発見されている。

弥生後期の墓は、土壙墓・土器棺墓・木棺（疊床）墓・円形周溝墓・方形周溝墓が佐久市内より発掘され、鏡・管玉・ガラス小玉が供わる。

（森永かよ子）

佐久の古墳時代

佐久平の古墳時代幕開けは3世紀後半、弥生時代以来の在土器である箱清水式土器が、東海地方や北陸地方或いは近畿地方の影響を受け、形態変化していくことから読みとれる。

その頃の集落は箱清水期に比べ非常に小規模で、住居の規模も小さくなる。しかし、墳墓は弥生時代と異なり集落から隔離した場所に規模が大きくなって出現する。それが窓の峯古墳群や根々井大塚古墳、鹿塚古墳である。

古墳時代中期の5世紀代になると、やや集落も大きくなり前期よりも居住エリアが広がる。いわゆる「開拓の時代」に入る。この事は5世紀後半に顯著で、今まで前期の集落が選地しなかった田切台地上の内部や沖積低地である野沢平にも進出し始める。住居にはカマドが導入される。

後期になると中期に展開した集落が立地を同じくして飛躍的に規模を大きくなる。田切地形上には上垂端・壇原遺跡・沖積地には300軒を越える住居が発掘された橋田遺跡等がある。この時期に作られた北西の久保17号墳は県下では珍しく埴輪が多量に出土している。

これ以降、佐久平においても横穴式石室をもつ古墳が築かれるようになる。当地には現在約500基の古墳が現存していると言われているが、その殆どが横穴式石室をもつ後期から終末期の古墳と考えられている。

佐久平の特徴は、「前方後円墳が造られなかった地域」ということである。

（富沢一明）

| 弥生時代 | | | 古墳時代 | | |
|------------|-------------|------------|----------------------|-------------------------|--------------------------------------|
| 前期 | 中期 | 後期 | 前期 | 中期 | 後期 |
| 三〇〇年前 前 | 二〇〇年前 前 | 一〇〇年前 前 | 二三五年 前 | 五九二年 前 | 六四五五年 前 |
| 播作・金糞器の伝播 | 佐久に播作文化が定着 | 新潟器・土器增加 | 銅鏡の普及 王の祭祀と參拜を受ける | 古鏡の發達はじまる 佛塔との交流が活発化 | 須磨器・カマドの登場 忍穂太子が招致となる 佐久で古風が残る |
| 下信濃石遺跡 | 北西の久保・五里田遺跡 | 社前遺跡 | 西井遺跡 | 上高田遺跡 | 森原遺跡 北西の久保古墳 |
| 吉田遺跡 | 根々井・反田遺跡 | | | | 真田・三河田大塚古墳 北西の久保古墳 |

佐久の奈良・平安時代

奈良時代は、律令体制のもと中央集権国家としての日本がかなち作られていく時代であった。政府は人民を戸籍・計帳に登録し、口分田を与え、租庸調などの税を課した。地方整備も進んだが、その中で当方は信濃国佐久郡という行政単位として掌握された。

和名抄などには、佐久郡は8郷からなっていることがみえる。すなわち、美里・大村・大井・刑部・青沼・茂理・余部・小沼である。大井や刑部などの郷名を記した墨書き器がみつかっており、わけても大井郷は現在の岩村田周辺をさすものとみてよいだろう。

律令制下、佐久地方には東山道が通過し、清水駅・長倉駅がおかれた。両駅とも、駅遺構そのものは発見されておらず、その場所については議論がある。

佐久には、名馬の譽高い望月牧、塩野牧、長倉牧の3つの御牧がおかれた。望月牧は御牧ケ原に、塩野牧と長倉牧は浅間山麓に置かれたものとみられる。浅間山麓の3市町にまたがる銳跡屋跡群などは、駅や牧と関連して成立した集落とも考えられる。

律令体制がほつれをみせる平安期の集落は、佐久の益進都のみならず、川上の山間部などかなりの広がりをみせる。小形の住居が作られる傾向にある。この頃の佐久地方の人口は約2万人程度とも試算される。

平安時代が終る少し前の天仁元年（1108）浅間山は大爆発を起こす。それは御代田・輕井沢地域を追分火砕流が覆い尽くす凄まじい噴火であった。ただ、その被害状況を示す痕跡は未だ確認されていない。この噴火をへて、時代は中世へと移行する。（堤 隆）

佐久の中世

中世は、鎌倉・室町・戦国・安土桃山時代の400年間、武士によって政治的支配がなされた時代をいう。

鎌倉時代、源賴朝は浅間に巻狩りをしたとする伝説があるが眞実は定かでない。一方、鎌倉時代の弘安2年（1279）、一連が布教のため佐久に足を踏み入れたことは確かである。一連は、大井太郎の居館をたずねる。そうした居館跡も佐久の大地に眠っているものと考えられる。その布教のパフォーマンスである羅念寺は、今日国無形民俗文化財として継承されている。

鎌倉時代の末に大井城主大井氏は、岩村田に蘿済宗の寺である龍雲寺を設けている。

応仁の乱以降、戦国は各地におよんだ。佐久地方では、大井氏と伴野氏の抗争の末、大井氏は零落、盟主不在の佐久は多くの小領主が割據することとなった。たとえば御代田の小井城の尾谷又六郎や志賀城の笠原新三郎などその一人である。

その後、佐久は武田信玄の侵略を受け、武田氏滅亡までの約30年間余り武田氏の領国となった。武田氏は天文15年（1546）に内山城、翌16年に志賀城、同17年に前山城、同18年に平原宿城を攻めたとされる。その後信玄は、前山城などでは改修して、拠点の城郭として利用するようである。こうした城郭遺跡や同時代の集落遺跡の調査も考古学的課題である。

天正10年（1582）、武田氏滅亡の後、佐久は徳川の支配下になった。これに最後まで抵抗した市川某は、佐久市の金井砦に籠もったが依田信蕃の攻撃に屈した。やがて時代は近世を迎える。（小山岳夫）

| 奈良時代 | 平安時代 | 鎌倉時代 | 室町時代 | 戦国時代 |
|-----------------------------|----------------------|---------------------|-------------------------|-----------------------------------|
| 七二〇年 奈良 東山道の整備 へ連邦 | 七五二年 東大寺の大仏である | 七九四年 京都 東京へ遷都 | 八八八年 千曲川の大洪水（「知の洪水」） | 一一〇八年 後醍醐天皇元年の大噴火 （奈良市役所成立） |
| 竹花・高坂院跡 | 青沼・大井・刑部・青沼・茂理・余部・小沼 | 碧原跡 | 砂原跡・片瀬 | 下高瀬石跡 |
| 竹花・高坂院跡 | 青沼・大井・刑部・青沼・茂理・余部・小沼 | 碧原跡 | 砂原跡・片瀬 | 金城 |



むぎくさとうげ 麦草峠黒曜石原産地 (佐久穂町)

標高2,000m、旧八千穂村麦草峠から茅野市冷山周辺にかけては、和田峠と並ぶ黒曜石原産地として広く国内に知られている。

白駒池へと続く国道の道脇には、大きな黒曜石岩体が今も顔をのぞかせており、この一帯から黒曜石が産出する。この地点では、かつて尖頭器が採集され、氷河時代に旧石器人たちがこの標高2,000m近い場所まで足を踏み入れていたことがわかった。

麦草峠の黒曜石は、細かな気泡が筋状に入るのが特徴である。気泡などによりやや質が落ちるため、和田峠産の黒曜石よりはその利用頻度が落ちる傾向にある。

原産地分析では、麦草峠の黒曜石は東京都府中市武藏台遺跡の後期旧石器時代初頭の文化層で確認されている。つまりこの麦草の黒曜石は3万年前にはすでに開発され、100km以上の距離を越えて関東方面に搬出されていたことになる。80kmはなれた野尻湖遺跡群でも、後期旧石器時代初頭の石器群に用いられていた。

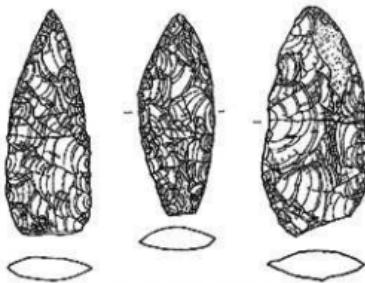
麦草峠は、その後も、縄文時代まで長く利用され続

ける原産地である。ただ、和田峠や足貴峠では、縄文時代の黒曜石採掘坑が数多く発見されているものの、ここでは現在のところ確認されていない。

原産地周辺は国有林地帯で、和田峠周辺ほど開発が進んでおらず、周辺の遺跡は数多く発見されていないが、池ノ平遺跡、トリデロック遺跡、駒出池遺跡などが知られ、いずれも発掘調査がなされている。

これらの遺跡では、黒曜石の尖頭器が発掘され、尖頭器製作のための原産地遺跡であったことがわかる。

冬季は氷雪により四道が閉鎖される。夏などにゆくと風光明媚な場所として心地よい。(提 降)



池の平遺跡の尖頭器



原石の状態まで接合した剥離類

はつぶうさん 八風山遺跡群 (佐久市)

長野自動車道八風山トンネルの工事に先立って行われた下茂内遺跡の発掘調査で、多量の石ヤリの未成品が発見された。それらの未成品は、真っ黒な割れ口をもつガラス質黒色安山岩で製作されていた。旧石器時代末から縄文時代草創期にかけて、ここに石ヤリ製作のアトリエが設けられたらしい。

佐久と上州の境にある八風山は、良質なガラス質黒色安山岩を産出することで知られる。この周辺の沢には、採り奉から人間の胴体ほどもあるガラス質黒色安山岩の原石が混じっている。先史人たちは、この宝の山を見逃すはずはなかった。

佐久市教育委員会が実施した八風山II遺跡の発掘調査では、後期旧石器時代の前半と後半を区分する指標となっている鉈尖丹沢火山灰 (AT) の下から、ガラス質黒色安山岩を用いた石刃素材のナイフ形石器が発見された。八風山II遺跡の放射性炭素年代は、3万年前よりやや古い値である。つまり後期旧石器時代初頭からこの原産地が開拓されていたことがわかる。

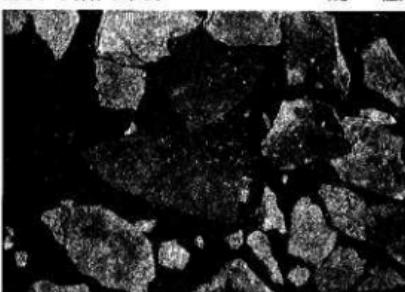
また、その下流にある八風山VI遺跡では、下茂内遺

跡と同様に石ヤリ製作のアトリエが発見された。遺跡に残された石器や石刷を丹念に接合した結果、人頭大ほどの原石に復元された。先史人たちは、人頭大の安山岩原石の「石の目」をうまく読みながら、石を打ち割り、石ヤリを製作したことがわかった。

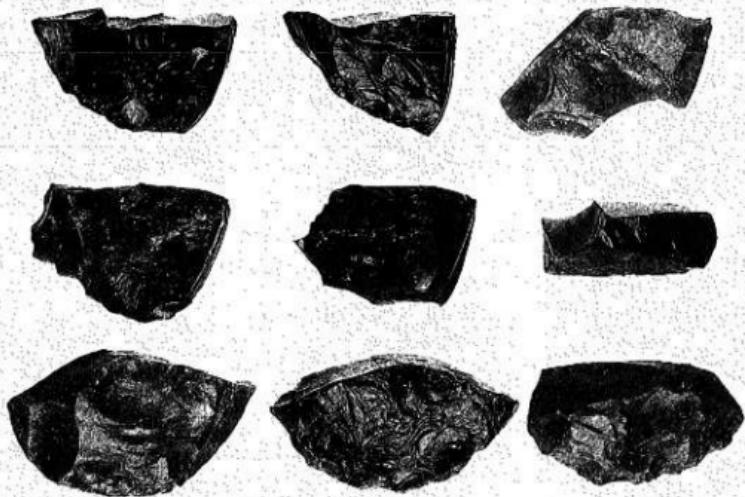
ここで製作された石ヤリはどこに運ばれたか。

その一部は八風山を上州側へと下り、富岡周辺の遺跡で用いられたことが、原産地分析の結果からわかっている。また、このガラス質黒色安山岩は、佐久地方の縄文時代においては、黒曜石と遜色がないくらい重用される石材である。

(堤 隆)



出土した石槍



中ノ原第1遺跡G地点の細石刃石核類

撮影：小川忠博

なかつばら 中ノ原遺跡群 (南牧村)

野辺山高原の旧石器遺跡の分布調査を独自に統けていた吉沢靖は、かつて麻生優らが旧石器を調査した中ノ原で、旧石器時代末にあたる明らかに矢出川とは異なるタイプの細石刃技法を確認した。

矢出川遺跡の北東2.5kmにあるこの場所の標高は1,270m、中ノ原第5遺跡B地点と名づけられた。

この一帯は高原野菜の大産地であり、近年では大型農機によって深く耕され、浅い地層にある旧石器遺跡はことごとく墜滅の危機に瀕していた。中ノ原第3遺跡B地点も例外ではなく、1990年の4月、9日間の日程で学術調査が実施されることになった。調査にあたって八ヶ岳旧石器研究グループが組織された。

中ノ原5B地点から発掘されたのは、北海道を中心東北日本にみられる湧別技法と呼ばれる細石刃技法をもった石器群であった。湧別技法とは、尖頭器状の両面加工の石器を縦割りにし、打面を作り出し、その打面から細石刃を剥がすものである。

石器は、細石刃のほか、彫刻刀形石器・錐・搔器・削器・礫器などが出土した。彫刻刀形石器の中には荒

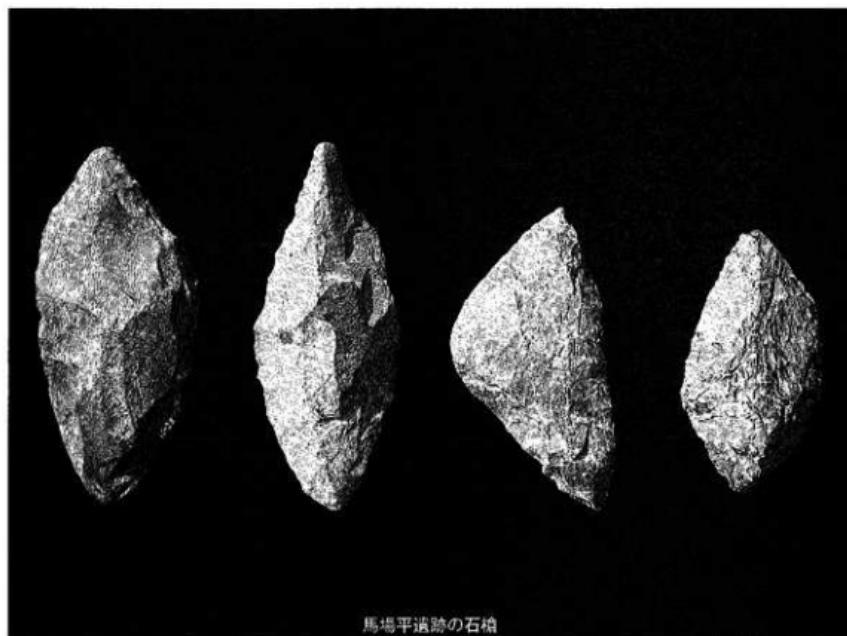
巣型と呼ばれる特徴的なものも含まれていた。

中ノ原5B地点から500m東の1G地点からも中島芳栄の努力によって細石刃が発見された。それは同様に湧別技法をもつ細石刃石器群であった。その後1G地点も1993年と1995年の2回にわたり発掘され、細石刃のほか、搔器・削器・礫器などが出土した。

両者の石器群があまりに近似するので、比較を進めていくと、両遺跡の石器どうしの遺跡間接乗がなされた。これにより両者は同一時間軸上に並んだ。両者を残した人々はおそらく同一集団で、その移動生活の過程で両遺跡が残されたものと考えられた。(桃 隆)



中ノ原第5遺跡B地点の細石刃遺跡群発掘風景



馬場平遺跡の石槍

ばばだいら 馬場平遺跡（川上村）

川上村の保育園や福祉施設が並ぶ一つ上の段丘、北には千曲川流れ、西にはその支流である黒沢川が流れる場所に馬場平遺跡がある。遺跡は大正時代の頃から、山井茂也や山井明などによって石器が柵の表面で採集され続けていた。そして、八幡一郎が『南佐久郡の考古学的調査』に資料を掲載し、それを読んだ芹沢長介が山井らの採集した資料を実際に見て、調査の必要性を感じ、昭和28年に発掘調査が行われた。

芹沢が注目し発掘調査の必要を感じた資料とは、尖頭器といわれる石器であった。その当時、この尖頭器がローム層から出土するのかどうか不確かなまま、すなわち縄文時代か旧石器時代かその所属する時代をめぐって、発掘調査や議論がなされていた最中であったのである。

そして、この馬場平の発掘調査は、ローム層の20~30cmの深さから尖頭器が出土することを確認し、その議論に明確な答えを導き出したのであった。馬場平遺跡は、尖頭器がローム層から出土する事実を国内で最初に確実なものとした旧石器時代の遺跡となった。

この尖頭器と呼ばれる石器は、旧石器時代の後半期を代表する道具であり、木の葉や柳の葉のような形になるように加工した石器で、その多くは槍などの先に付けた狩猟道具と考えられており、川上村では他に柏垂遺跡をはじめ多くの遺跡で、多量に見つかっている。これら採集資料は川上村文化センターで、発掘資料は東北大大学で見ることができる。

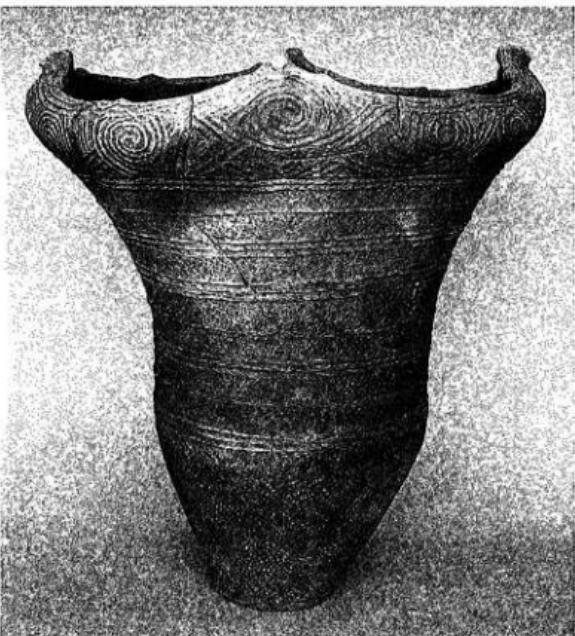
最後に、山井茂也、山井明の調査活動が、馬場平遺跡の発掘調査を導いただけでなく、その後の旧石器時代研究に大きな影響を及ぼした事は、特筆されるべき業績である。

(長崎 治)



昭和28年の馬場平遺跡調査風景

黙面（イノシシ）のついた大型土器
写真提供：小海町



なかはら 中原遺跡（小海町）

縄文時代前期後半、縄文時代の温暖化はピークを過ぎたが、この頃各地で規模の大きい集落や縄文時代的な道具が出現する。関東地方から中部地方では、諸磕式という土器が見られるようになる。その中でも中間に位置する諸磕式b式と呼ばれる土器は、浮線文という判み日のある粘土の縦を、直線的あるいは渦巻き状に貼り付けた文様を特徴とし、さらにはイノシシと思われる小さな突起（默面把手）を土器の口（口縁部）につけるものが見られるようになる。

中原遺跡は、千曲川左岸の小海町本間川地区、八ヶ岳東麓の裾野末端に位置する。今から約5,500年前の諸磕式b式期の集落で、昭和62年から平成5年に発掘調査がされた。ここでは15軒の聚穴住居址が発掘され、膨大な量の土器や石器が出土している。

中でも残りがよく完全に近いかたちで復元された土器は高さ約60cm、口縁の径は45cmに達する巨大な深鉢土器で、4つの默面型の把手が付いた逸品である。この他にもやはりイノシシと思われる默面把手の出土数は150にも及ぶ。

彼らと猪の関係とはどのようなものだったのだろう。一番の狩猟対象だったのか、あるいは彼らのなかに神を見たのか？ 調査にあたった島田恵子氏は、この集落での猪飼育の可能性をあげるが、果たしてどうだろうか。

また近年では、この種の土器と黒曜石の流通を考え合わせる見方も出ている。実際、中原遺跡でも黒曜石の出土量は多い。

佐久地方でも遺跡発見例の少ない前期後半にあって、豊富な遺物や聚穴住居跡などが確認されている意味は大きい。

（藤森英二）



大型土器の出土状況



人面香炉形土器
撮影・辻澤雅人

おおみやま 大深山遺跡 (川上村)

川上村大深山遺跡は昭和8年に牧場の柵を作る際、多量の土器が出土して発見され、その後、昭和28年に地元住民による調査が行われ、昭和34年からは八幡一郎を指導者として、昭和37年まで本格的な発掘調査が行われた。調査は、地元大深山の人々で組織された大深山遺跡保存会の積極的参加で進められた。

この発掘調査により、縄文時代中期の堅穴住居、積石遺構とともに多数の土器と石器が出土した。検出した堅穴住居は51箇所にのぼり、その後の分析により多い時期で10軒程度の集落が営まれていたと考えられている。大深山遺跡は、標高1,300mに及ぶ高所に位置するものの、天狗山の南斜面で南に千曲川を望み、西側に沢が流れ、現在でも住みやすいと感じられる場所である。

数多くの縄文土器や石器などが出土したが、その出土遺物の中でも一番目を引くのが、人面香炉形土器と命名された土器である。全体的に黒色をおび、二つの円形の透かし窓が人の目のように見えるため人面と呼ばれるのであろう。この土器の内側や上部に煤の付着

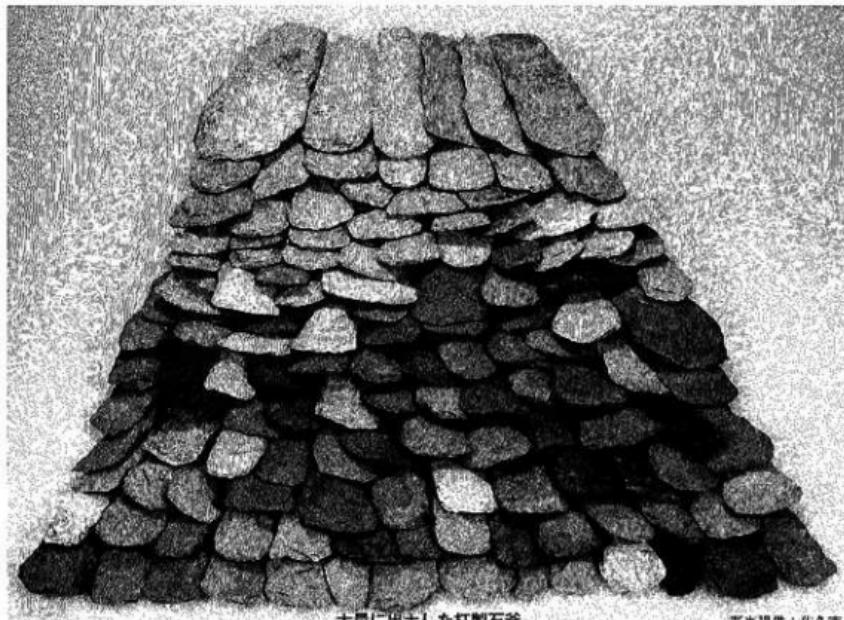
がみられることなどから、火をともしたランプと考えられ。数量の少なさや重厚な作りなどを考えても、日常の生活道具とは考えにくいものであり、何か特別な利用を想像させるものである。

現在、遺跡は国指定の史跡として公園化され、自由に見学でき、出土した資料は川上村文化センターで見ることができるが、発掘調査当時、先駆的であった大深山遺跡保存会の発掘への参加と遺跡の保存や整備活動は、現在も続く復元性向の整備や遺跡公園の整備などに、その熱意が継続されていることを付け加えておきたいと思う。

(長崎 治)



大深山遺跡



大量に出土した打製石斧

写真提供：佐久市

おおなら 大奈良遺跡（佐久市）

一般に縄文時代中期は、小高い台地上に集落が発見されることが多い。しかし大奈良遺跡は、現在の水田付近に眠っていた。

遺跡は千曲川右岸の河岸段丘、標高約704mの地点に位置する。背後には駿平山が迫り、南側は雨川によって形成された扇状地が広がる。

縄文時代では、堅穴住居址が中期中葉で1軒、後葉で16軒、後期初頭で1軒確認された。この中に後期初頭の一軒と中期後葉の2軒の敷石住居址が含まれる。その他多数の土坑、屋外埋甕、屋外炉、また時期は不明ながら配石兼構もあった。住居址の配置を見ると、未調査部分も含め、馬蹄形集落の可能性がある。

生活用具である土器や石器の他、土偶や十版、砂岩製の重ね飾りなど多種多様な遺物が出土しているが特に次の2点は特筆に値する。

まず中期後葉土器では、関東地方を中心に分布する加曾利E式、南信から山梨県の曾利式、中南信地域に多い唐草文系土器に伴い、東信地域を中心に分布する通称「佐久系土器」が多量に出土した。今後佐久地域

での土器編年を考える上で貴重な資料となろう。

また大奈良遺跡からは破損品を含め3,498点と多量の打製石斧が出土した。多くが遺跡付近の石材である頁岩や溶結凝灰岩で製作され、繰り返し使用され廃棄されていた。打製石斧は、鍬のような農耕具とする説や、野生の芋を掲げ出す道具とする説などがあるが、いずれにせよ縄文時代中期の生活には欠かせないものであったのだろう。

遺跡の立地、土器編年、大量の打製石斧の製作と消費。今後の研究に欠くことの出来ない重要な遺跡である。

（藤森英二）



深鉢（埋甕）の出土状況

井戸尻Ⅲ式比定の深鉢形土器 石★提供：佐久市



よりやま 寄山遺跡（佐久市）

寄山遺跡は、佐久市瀬戸・志賀に所在する。遺跡は関東山地から連なる八風山・荒船山塊の山麓末端に位置し、北を志賀川に南を滑津川に挟まれた丘陵縁辺に位置する。現在は工業団地が造成され旧来の地形は消滅している。

遺跡は平成2年より3カ年をかけて周辺遺跡も含め約70,000㎡が調査された。その結果、古墳などを含む縄文時代～平安時代に及ぶ集落が発見され、住居跡としては約15軒が調査された。

住居跡の内訳は、縄文時代前期3軒、縄文時代中期中葉が28軒、中期後半が46軒で、その他に弥生時代後期3軒、古墳時代後期2軒、平安時代26軒等が確認された。

この内主体を占める縄文時代の住居や遺物包含層からは多量の縄文土器・石器や土偶類が発見された。特に中期中葉と中期後半の資料として、隣接する勝負沢遺跡H37号住居址からは釣り手土器や寄山遺跡H79号住居址からは赤彩された有孔錫付土器などが出土した。

中でも圧巻なのは、井戸尻Ⅲに比定される高さ66cm

の上器で（写真上）、85号住居址より出土した。釣り手と刻みを入れた堅苦しい装飾は重厚感が漂い本遺跡を代表する逸品といつてよいだろう。

出土品は、佐久市志賀にある市教育委員会文化財課の展示室で見学することができる。事前に連絡したほうがよい。（☎0267-68-7321）。（富沢・明）

細
文



寄山の中期の深鉢形土器 撮影：小川忠博



こうど 郷土遺跡（小諸市）

郷土遺跡は、小諸高校の北方、小諸市大字甲字中郷土の標高約830m前後の緩やかな斜面上にある。

昭和初期から縄文遺跡として著名であったが、昭和36・40年には八幡一郎氏により発掘調査が行われ、敷石住居跡等が発見された。敷石住居跡としては全国的にも早い時期の発見であり、「敷石住居跡の郷土遺跡」としてその名が知られることがとなった。

40年に調査された敷石住居跡は今も保存され、市指定文化財となっている。平成4～7年には上信越自動車道建設およびその関連工事に先立ち、小諸市教育委員会・長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施され、遺跡の中核部分の様子が明らかとなった。

このうち高速道路用地内で発見された遺構には縄文時代早期と平安時代の住居跡や古墳もみられるが、中心的な時期は縄文時代中期中葉～後期初頭であり、発見された当該期の住居跡は107軒、土坑は時期不明も含め1,000基を超えており、浅間山麓を代表する拠点的集落といえる。

遺物は膨大な出土量であり、整理箱で約900を数え

る。多量の土器・石器の他、土偶67点、三角柱状土製品・土鉢など希少遺物の出土も少なくない。

写真は、24号住居跡の土器出土状況である。大型の石組炉の3隅に計4点の石棒を樹立し、奥壁には容量約90ℓをはかる大頃浅鉢を中心に、底部を切断された6個の土器が逆位で伏せられていた。住居廃絶直前もしくは廃絶時に何らかの祭祀行為が行なわれていたことがうかがえる。

遺跡はしなの鉄道小諸駅より車で10分、出土品は長野県立歴史館（☎026-274-2000）、市立郷土博物館（☎0267-22-0913）で見学できる。（桜井秀雄）



24号住居跡出土土器 写真提供：長野県立歴史館



みやだいら
宮平遺跡 (御代田町)

宮平遺跡は、御代田町大字豊昇の湯川左岸にある。現在は畠地となっている。

その遺物量の豊富さから、古くから注目を浴び、昭和初年の八幡一郎の調査に始まり、NGマンローも調査を行っている。現在、浅間縄文ミュージアムによって継続的な調査がなされており、御代田町史跡に指定されている。

縄文時代中期から晩期にかけての遺跡であるが、とくに中期後半から後期にかけての遺構が集中し、湯川水系の拠点的集落となっていたものと思われる。堅穴住居や敷石住居が40軒近く発掘されており、石を組んだ後期の墓坑も確認されている。

遺物も豊富で、土器や石器のほか、後期の耳飾り類、ヒスイの垂飾、石棒、土偶などが発掘されている。また、灰層によってよく保存された動物骨が多數あり、シカ・イノシシを中心、クマ・カエル・カワシンジュガイなどがみられた。また、ドングリなどの炭化物も出土している。これらは、縄文人たちの食生活を垣間見る貴重な資

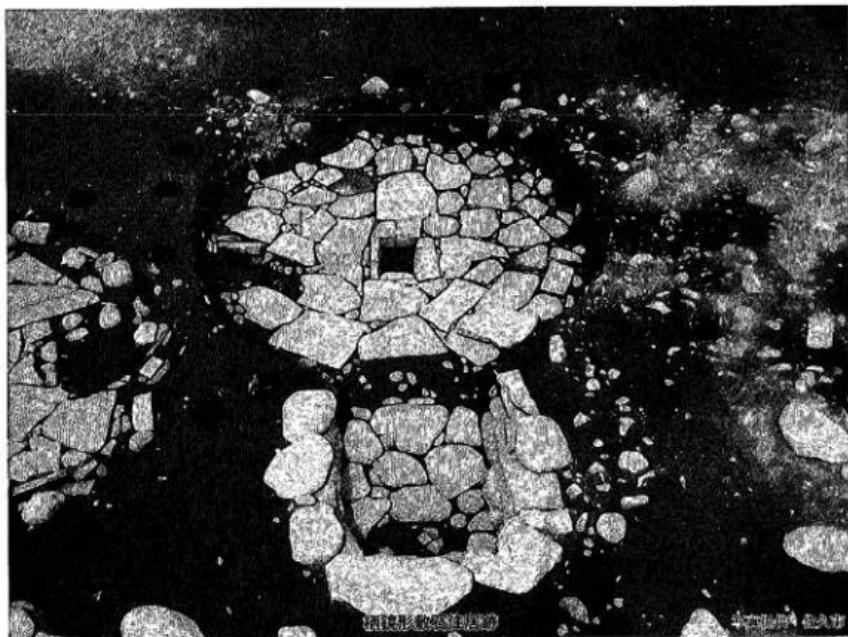
料である。

写真は、大型住居から発掘された人面付き釣手土器で、縄文中期後半のものである。高い鼻には2つの鼻孔があり、鼻の下の筋も表現される。細い眼の表現もある。従来、釣手土器は従来ランプ説が強調されるが、この上器には、胴部外面にべったりと炭化物が付着し、火に掛けられたことは明らかである。

遺跡はしなの鉄道みよ駅より車で10分、出土品の多くは、御代田町浅間縄文ミュージアムで見学することができる。(☎0267-32-8922) (堤 隆)



釣手土器の出た大型住居の発掘



ひらいし 平石遺跡 (佐久市)

縄文時代中期後半から後期にかけて、住居の床面に平たい石を敷き詰めた「敷石住居」が出現する。佐久を含む東信地域にはその割合が多いと言われている。蓼科山麓には火山活動の影響により板状に割れる安山岩「鉄平石」が産出するが、これが敷石住居の材料には最適である。この蓼科山麓八丁地川左岸の段丘にある佐久市望月の平石遺跡も、鉄平石を利用した遺跡の一つである。

平石遺跡は昭和62年と平成2年に発掘調査が行われた。この中では縄文時代早期始めの樋沢式を中心とした押型文系土器が大量に出土し、この他にも前期そして中期前半の土器も見つかっているが、中期後半から後期前半では4軒の住居址が検出されている。

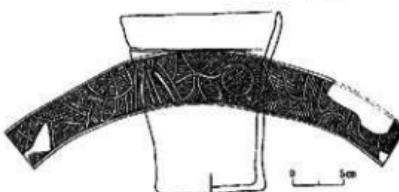
特にこの中には12軒の敷石住居址が含まれる。なかでも後期前半、星ノ内式期の住居址では、円形の住居址に敷石があるだけでなく、鉄平石と川原石で5~6段に積み上げられた振り出(柄鏡部分)が残されており、これは全國初の例であった。さらに石で囲われた炉跡からは、まるでシカなどの動物を表現したかのような

絵画的文様のある小型の深鉢形土器が出土している。

他にも生活用具である土器や石器の大量出土はもちろんだが、この時期では土偶や石棒、そして多數の埋葬などが見つかっており、佐久地域を代表する縄文遺跡の一つと言える。

この場所は、闇場整備の対象であったが、遺構の重要性が認められ、先に説明したものと合わせて軒の後期柄鏡形敷石住居址については、現地にて埋め戻し保存されている。遺物は佐久市歴史民俗資料館で見学が可能である。

(藤森英二)



絵画的文様のある出土土器



も ざわみなみいしどう 茂沢南石堂遺跡 (軽井沢町)

茂沢南石堂遺跡は、軽井沢町南西部の茂沢区に所在する。湯川とその支流である茂沢川により開析された標高約900mの台地上に立地する。

昭和初期から縄文遺跡として知られていたが、昭和33・34年の県道改修工事の際に多くの遺物が出土し、昭和36~41年および昭和52~55年の間に、計8次にわたる12地点の発掘調査が三上次男氏・上野佐也氏らを中心として行われてきた。55年の調査には佐久考古学会員4名が調査員として参加している。

縄文時代中後期の遺跡であるが、なかでも後期が主体となっており、堅穴住居跡・敷石住居跡の他、石棺墓を含む配石遺構や環状列石などが発見された。

現在、遺跡の多くは畠地となっているが、調査された第1地点など一部は、町指定文化財として保存されており、発見された配石遺構も当時のままで目にすることができる。

写真は、保存された配石遺構を構成する石棺墓であるが、平石を組み合わせたもので、長さ1.7m、幅60cm、深さ45cmをはかる。中央部に径約20cmの丸石がみられ

るが、これは抱石の可能性が高い。発掘調査では内部の南端には後期加曾利B式の土器が伏せた状態で出土していたため、荒被葬と考えられる。

遺物は、中後期の土器、土製円板、石器では400点を超える打製石斧をはじめ、石錐・石匙・磨石・石皿などが出土している。なお、後期層之内1式直前段階の土器群については「茂沢タイプ」として提唱され、その独自性が指摘されている。

遺跡はしなの鉄道中軽井沢駅より車で20分、出土品は、軽井沢町歴史民俗資料館で見学することができる。
(☎0267-42-6334) (桜井秀雄)



茂沢南石堂遺跡



いしがみ 石神遺跡（小諸市）

石神遺跡は、小諸市大字八溝字石神ほかに所在し、浅間山麓の標高794～845mの緩やかな斜面上にある。

遺跡の中心部には、水量豊かな湧泉と2本の樺の大木が立っており、その根元には地籍名にもなった石神と呼ばれる石の祠がある。現在、多くは耕地となり、そして南端には上信越自動車道が通っている。

明治時代から縄文遺跡として広く知られており、遺物採集も盛んに行なわれていた。発掘調査は、平成3年に小諸市教育委員会による圃場整備事業に伴うものと県理文センターによる上信越自動車道建設に伴うものが実施されている。このうち高速道路用地内では古墳時代前期の堅穴住居跡3軒等が認められたにとどまるが、圃場整備対象地では縄文時代前期～後晩期、平安時代の遺構・遺物が発見された。なかでも縄文時代後晩期が主体であり、堅穴住居跡28軒、土坑墓5基、石棺墓20基がみられている。

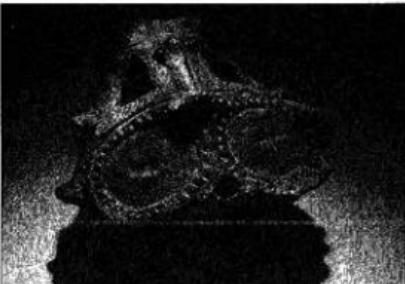
遺物も豊富な土器・石器等に加えて、土偶・耳飾りなどの土製品やヒスイ原石や玉類などが出土した。他にも自然遺存体が多くみられるのが特徴であり、墓か

らは8体の人骨、住居跡からは骨角器の他、イノシシ・シカ・オオカミ・キジや貝類でドブガイ・イシガイ・ハマグリなどが出土している。

写真は、美齊津一氏採集資料の人面付注口土器である。晩期の所産と考えられ、朱が塗られている。なお、他にも追光器土偶などが同氏により採集されており、貴重な資料となっている。

遺跡はしなの鉄道小諸駅より車で20分、出土品は長野県立歴史館と小諸市教育委員会に保管され、小諸市立郷土博物館で美齊津氏の採集資料も含めた展示を見ることができる。

（桜井秀雄）



追光器土偶

撮影：小川忠博



氷I式土器

こおり 氷遺跡 (小諸市)

氷遺跡は、小諸市の千曲川左岸、大字大久保の水堀落にある。堀落は、古くは布引觀音への参道にあたり、また風穴を利用して氷室がある。標高およそ600m、千曲川の河床より比高50mに位置する。現在は畠地となっている。

1955年に永峯光一氏らにより始めて発掘調査が行われた。出土した土器は、中部高地の晩期後半を代表するものとして氷式土器と壺式設定され(『氷遺跡とその研究』『石器時代』9)、遺跡は標識遺跡である。

縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡であり、遺構は見つからなかったが、多量の土器、土製品、石器が出土している。

土器は主に、浅鉢、深鉢、壺が出土している。縄文線による変形工字紋・網状文をもつもの、沈線により変形工字紋が施されたものがあり、前者が氷I式、後者が氷II式にあたる。また条痕文土器も出土している。

土製品は鰐面土偶、円板等が出土している。石器は土器に比して少ないが、石簇、石錐、磨石、等が出土し、打製石簇が多い。

氷式土器は、その後の研究で東北地方の急ヶ岡式系上器と接触し、南は中国地方まで及んでいることが判明している。また、条痕文式系土器とも併存することから、東西の交流、文化の伝播等を検討する有効な材料といえる(『氷式土器』『日本土器事典』)。

遺跡は、しなの鉄道小諸駅より車で10分、あぐりの湯こもろからは徒歩5分。出土品の多くは國學院大學で所蔵されているが、一部は横古園内、小諸市立郷土博物館で見学することができる。(☎0267-22-0913)

(望月博史)



発掘中の氷遺跡 写真提供：小諸市



北西の久保遺跡（佐久市）

千曲川の支流湯川の沿いの細長く張り出した標高690mの台地上に位置し、現在は信州短期大学が建立している。昭和57・60年の発掘調査でその全てが明らかになった。豊穴住居跡は弥生時代中期後半92軒、後期38軒、古墳時代中期18軒、平安時代後期9軒であり、中期から後期にかけて群集する古墳群も19基発見された。

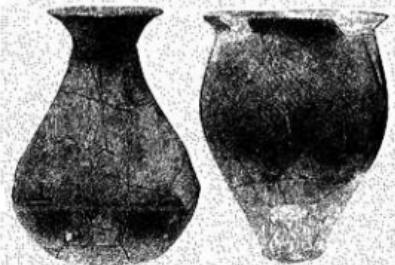
弥生時代中期後半、紀元前1世紀頃の豊穴住居群92軒は厚真の台地全面に広がっており、その後の発掘調査で北東に接する西一本柳遺跡にまで同時期の豊穴住居が広がっていることが明らかとなった。紀元前1世紀に私たちが予想もしていなかった巨大な集落がこの地域に営まれていたことがわかったのである。遺跡の北西部の湿地帯は、現在でも佐久地方の一部水田で穀倉地帯となっている。往時の人々も佐久平の水田開発を行なうにあたり、まず、この湿地帯に眼をつけ、これを取り巻く北西の久保遺跡をはじめとする台地上に農業集団の集落を営んでいったものと考えられる。

出土した土器は壺、壺、鉢、高杯などでこれらはセッ

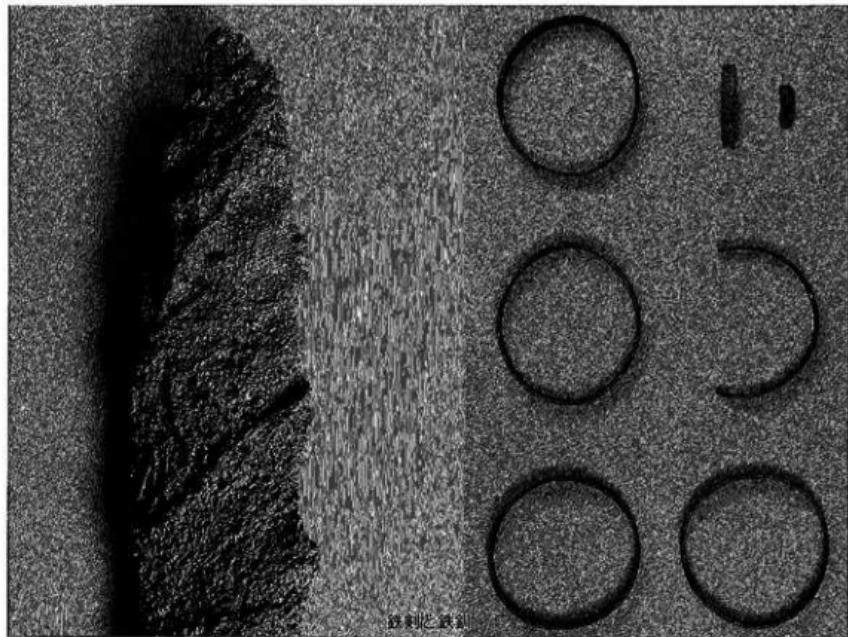
トで「栗林式土器」（写真）と呼ばれ、紀元前2世紀ころ長野県北部・千曲川上流域で誕生し、紀元前後くらいの時期まで制作されたと考えられている。

千曲川流域のほか、松本、大町、諏訪、上伊那地域など、下伊那を除く長野県のはなは全城と群馬県や埼玉県北部にまたる分布域を持つ。更に北は新潟県、石川県、富山県、南は山梨県、神奈川県、愛知県などで地元の別様式の土器との共存が認められる。「栗林式土器」は中部日本に広汎に分布する土器であり、近隣諸地域と活発な交流があったことを示唆している土器なのである。

（小山岳夫）



栗林式土器



ごりた 五里田遺跡 (佐久市)

五里田遺跡は、佐久市根ヶ井の湯川右岸の河岸段丘上にある。標高681~685mの緩やかな南傾斜で、現在は長野県警察本部の佐久地区宿舎になっている。

南流する湯川が方向を変え西に蛇行するこの地域には弥生中期後半の栗林式期の聚落がいち早く登場した。

五里田遺跡は、弥生中期後半の集落（竪穴住居43棟）と弥生後期の円形周溝墓・方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓、古墳時代中期の周溝を持つ墓域である。

五里田遺跡の弥生中期住居址は、隅丸長方形が大半であるが、楕円形・方形もある。覆土は浅く、弥生後期の周溝墓や土坑と重なっている。

住居址からの主な遺物は栗林式土器と石器であるが、鉄劍2点が住居より出土した。墓坑からは円形周溝墓より鋳造の銅鏡5点、木棺墓より鋳造の鉄劍5点、後期箱清水式の壺柄より碧玉管玉1・ガラス小玉11個が出土している。

写真はII 1住居跡出土の鉄劍で、布が巻かれている。切先部のみで残長18.2cm、幅2.8cm。II 2住居の鉄劍の分析では「紗劍」という鍛鐵を使って鍊鐵あるいは

銅を作り出すBC 1世紀代の新しい方法で作られ、実際に耐えるものという。鉄劍は絹布を螺旋状に巻き、織維密度は弥生終末から古墳前期の遺物に近い値である。分析結果は住居址の年代観とすべて一致するものではなく、重複した構造との遺物の帰属が考慮される。

鉄劍は、超軟鋼製で螺旋状であったようだ。中部から関東に弥生後期に盛行する墓の副葬品で、右手に装着するのが一般的、軟鋼のため装着は比較的自由である。鉄を占有できる身分の人の墓とされる。

岩村山にある信州短期大学の西側が遺跡で、遺物は佐久市教育委員会に保管されている。（森泉かよ子）



五里田遺跡

写真提供：佐久市



超大型住居

約4000年前の古墳時代をさかね

にしちかつ 西近津遺跡（佐久市）

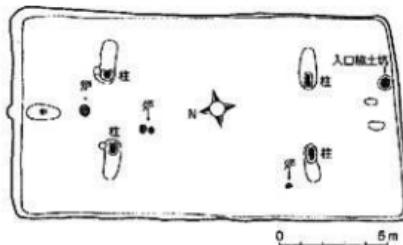
西近津遺跡は、佐久市長戸の近津神社南に所在し、田切り地の木場部に立地し、南側は渓り川の氾濫低地へ向かって緩やかに傾斜している。

弥生時代から平安時代および中世の大規模な集落遺跡であるが、なかでも注目されるのは弥生時代後期の国内最大級となる超大型竪穴住居跡が発見されたことである。県埋蔵文化財センターが平成18年に調査した写真の竪穴住居跡は、平面形は長方形を呈しており、N11°Eの主軸方向をもつ。検出面での規模は主軸方向が18m、短軸方向で9.5m、立ち上がりは最深部で約75cmを測り、床面積はなんと153m²（46坪）に達している。主柱穴は4本で、南側に入口用の梯子を固定する柱穴が認められ、その脇には貯蔵穴の可能性をもつ土坑が1基みられる。炉は3ヶ所4基が設けられている。奥壁側中央に棟持柱柱用と思われる柱穴があることと桁行きの主柱穴間に補助柱穴があることは一般住居跡との大きな違いである。主柱穴は長辺円形を呈し、段を有している。これは大槻柱材を設置、あるいは抜き取りやすくなるためのものと考えられる。

建築史の宮本長二郎氏によると、屋根が地面まで垂き下ろされない壁立ちの形式で、屋根は切妻と入母屋、あるいは寄棟を複合させた形が想定できるという。また高さは8~9mに達する可能性があり、首長のイエもししくは祭殿が想定されるということである。

遺物は、意外と少なく床面出土の土器はほとんどない。特記遺物としては櫛土出土の銅削片・鉄鉋片が各1点、また柱穴出土の鐵網片1点などがあげられる。

遺跡はJR小海線中佐駅より徒歩で5分、調査は今年も行われており、20年度まで続く予定である。今後の調査結果も期待される。出土品は県埋蔵文化財センターで保管している。
(桜井秀雄)



超大型住居模式図



かみすぐじ 上直路遺跡（佐久市）

佐久市岩村田字上直路は、浅間山麓末端の山切地形の発達した地域で、東西を山切りに挟まれ細長い台地上の遺跡群の一つにある。標高715m。この場所は、発掘後の今は葬祭センターとなっている。

弥生後期になり、集落は台地が低地に臨む台地縁辺部に広がり、岩村田から長上呂一帯に分布する。上直路遺跡は弥生後期縄清水式土器の集落である。

遺構は弥生後期前半の住居跡2棟と新しい溝があり、木棺墓を伴う第1号住居跡は南北10m、東西7mの隅丸長方形である。弥生後期の住居跡では大型である。

2006年には集落として東側に続く上直路遺跡Ⅲから弥生後期の堅穴住居跡2棟が調査されている。

第1号住居跡の東壁下に長方形の土壙があり（溝に埋され全容は不明）、高杯1点と甕3点の土器の下に、銅鏡に成人骨が貯入した状態で出土した。銅鏡内の骨は左右前腕部の桡骨・尺骨である。人骨は火熱を受け炭化し、土壙底面には炭化物層と板状の炭化物、覆土にも炭化物が多く含んでおり、遺体を埋葬後焼いている。銅鏡は15点あり、国内最多の出土数である。銅鏡

内に残った骨の状況から頭位は南で、左手に10点、右手に5点の銅鏡を装着していた。鏡はいずれも鋳造品で、内面にバリを残す。帶状円環型銅鏡で径6cm、帯幅6~8mm、厚さ1.6mmである。土壙は南北残長80cm東西108cm深さ20cmを測る。祭祀を司る者を祀り納め、祀り葬ったようである。隣のH2住居からは帶状曲輪型と思われる扁平な鉄鏡片がある。

写真は、左下の土壙底面に右腕の銅鏡、中・小型の甕と高杯、左上に左腕の銅鏡がある。

小海線岩村田駅の北、徒歩5分の所に遺跡がある。遺物は佐久市教育委員会が保管する。（森川かよ子）



住居跡と土壙墓（右下）



瀧の峯古墳群2号墳から出土した土器

たきみね 瀧の峯古墳群（佐久市）

瀧の峯古墳群は、佐久市根岸に所在する。古墳群は立科山麓から伸びた丘陵が佐久平に突き出た末端に位置し、古墳群からは浅間山と佐久平の眺望がすばらしい。

瀧の峯古墳群は5基の古墳からなり、昭和61年の市跡掘査事業の一環として1号墳と2号墳が発掘調査された。その結果、2つとも佐久平では初めてとなる前方後方型の墳墓であることが確認され、大きな注目を浴びることになった。

特に2号墳の規模は全長18.3mで後方部を佐久平側に向かって立地している。後方部は土橋状となる。主体部は後方部中央にあり、素掘りの土塁で長さ2m程の長方形で、内部には木棺があったとみられる。そこから人の骨が出土した。おそらく埋葬された人物とみてよいのである。

くびれ部の周溝底からは、壺・甕・高壺・器台・鉢等が出土した。これらの土器群は形態より、佐久平に広がった赤陶後期の赤い土器「給清水式土器」の系譜はひくものの、器台や高壺は東海地方の影響を色濃く

示した作りとなっている。新たな古墳時代の胎動を感じさせる土器群といえる。

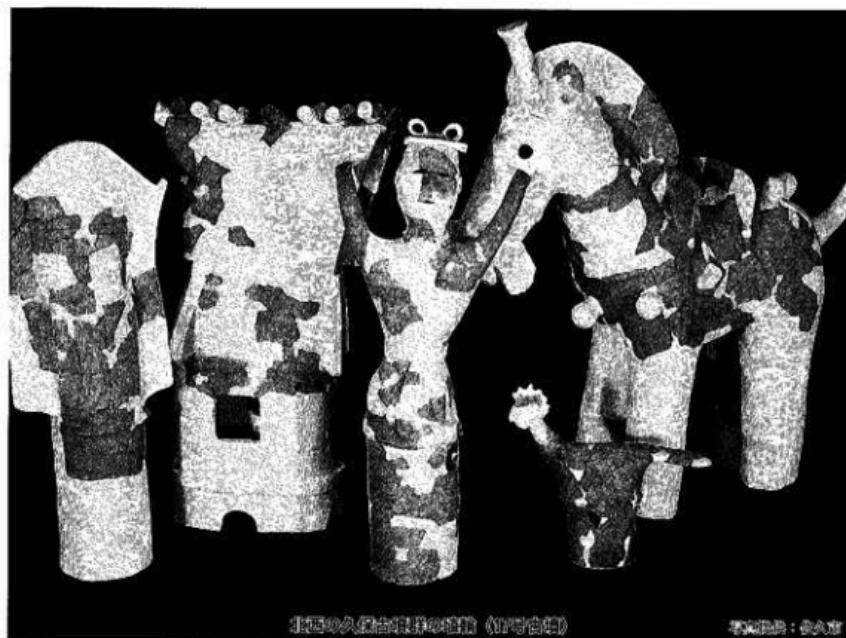
写真は瀧の峯古墳群2号墳で、丘陵上の地形の制約からか、前方部と後方部の長軸がずれていることがうかがえる。

古墳は、新幹線の佐久平駅から「サンピア佐久」方面へ車で30分ほどの距離にあるが、場所等は佐久市教育文化財課に照会願いたい。出土品は事前に連絡のうえ市教育文化財課（☎0267-68-7321）で見学することができる。

（高沢一明）



瀧の峯古墳群2号墳



北西の久保古墳群の埴輪（17号古墳）

写真提供：佐久市

北西の久保古墳群（佐久市）

本古墳群は、佐久市岩村田の湯川に臨む細長い台地上に築かれている。佐久平において5世紀～7世紀まで同一の場所に古墳群が築かれていたのは本古墳群が唯一で、豊富な埴輪群の出土でもよく知られる。

本古墳群は昭和57年と60年に二度に分けて発掘調査がされ、その結果5世紀代10基、6世紀代1基、7世紀5基の古墳が発見された。この内本古墳群で最も注目されたのは6世紀後半に築造されたと考えられる第17号墳から出土した埴輪群である。第17号墳は台地中央に造られており、墳丘は既に削平され主体部は検出されなかったが周溝から径24mの円墳であることが確認された。

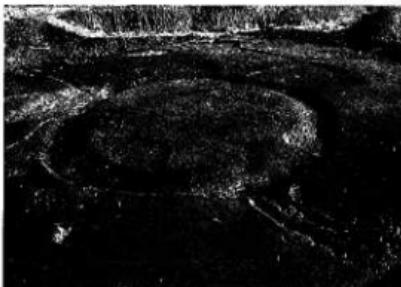
埴輪群はこの周溝内から破片の状態で出土し、築造時の樹立位置を保っているものはなかった。ただ、埴輪の種類は豊富で、円筒埴輪、朝顔形埴輪と並び、器財形埴輪として家・太刀・盾・ゆき、人物埴輪として巫女・武人・農夫、動物埴輪として馬・獣馬、猪・鹿、鳥などがあった。特に注目されるのは「字形鏡板をはじめとする馬具一式を装着した飾り馬と裸馬

の存在だ。裸馬には手綱が表現されており、当時東国に広がりつつあった乗馬の風習と並んで牧経営の中での馬飼育に関する資料として考えられている。

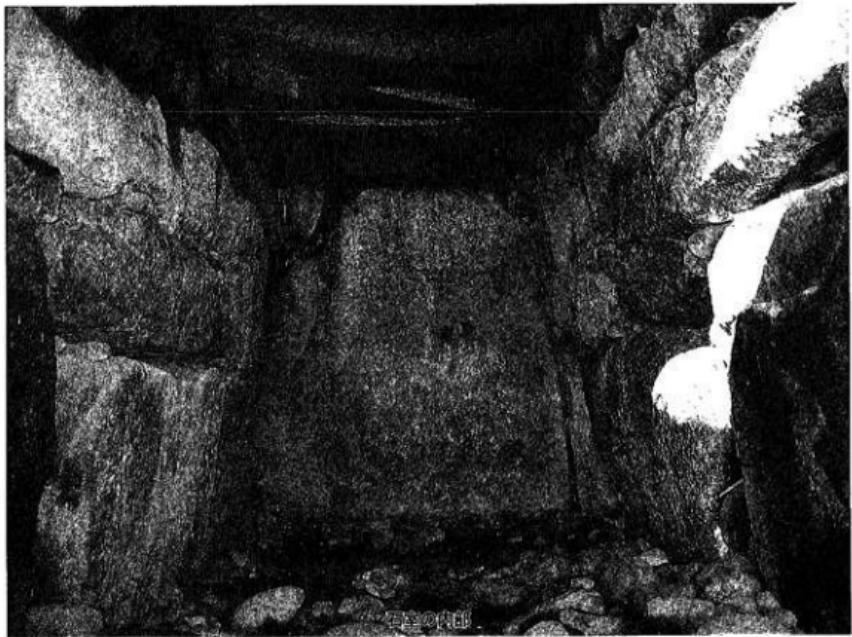
これらの埴輪群は形態などから同時代の毛野地方資料と酷似しており、古墳時代後期における群馬県と佐久平の交流を色濃く示す資料となっている。

写真は北西の久保古墳群17号墳出土の埴輪群で、長野県内でもこれはどの多様な埴輪群を一同にみられるのは本古墳群だけである。出土品は現在、佐久市指定文化財となり佐久市教育委員会文化財課で見学することができる。

（高沢一明）



北西の久保17号古墳



みかわだおおつか 三河田大塚古墳（佐久市）

三河田大塚古墳は小諸市の耳取大塚、佐久市安原の安原大塚と並び古くから佐久平の三大塚の一つとして有名である。

三河田大塚は、佐久市三河田に所在する。古墳は千曲川と滑津川により形成された河岸段丘の縁に位置し、古墳からは野沢平が一望できる。

本古墳の墳形は鶴麗な気を擡ぐ円墳で、規模は径約30m・高さ約5mである。古墳正面に立つとまず目に飛び込んでくるのは巨石を用いて頑丈に造られた鶴居石とそれを支える2本の袖石である。この石室入口の前には前庭部と呼ばれる広さ8畳ほどの空間が存在する。葬儀のおりはここで死者への弔いが行われたと考えられている。

この鶴居石をくぐると玄室に至る通路の「沃道」と呼ばれる部分である。長さ約2.1m・幅1.5m・高さ約1.3mで、大人1人が中腰でやっと通り抜けられる。もう一つの鶴居石をくぐるとそこは遺体の埋葬場である「玄室」にたどり着く。

ここには巨大な空間が広がり、長さ約6.3m・幅約

2.1m・高さ約2.9mで、正面の奥壁、頭上の天井石の巨大さに思わず息をのむ。薄暗さに日が慣れ、まわりを見回すと石室壁に使われている石の間には漆喰のような白い粘土が詰められている。

三河田大塚古墳は、墳丘並びに石室の規模が大きく、保存状態が良い事などから長野県指定の史跡となっている。出土品に関する記録はない。

古墳は新幹線の佐久平駅から国道141号を南進し、佐久郵便局を右折して住宅街の中にいる。駅よりタクシーで20分。現在、石室内へは立ち入り禁止となっている。

（高沢一明）



墳丘と石室の入り口



みみとりおおつか 耳取大塚古墳 (小諸市)

耳取大塚古墳は耳取集落の東南端、字塚の前にあり、周囲は畠地と水田になっている。

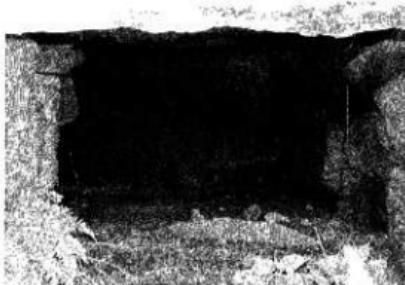
当該古墳の調査報告については、明治13年の『長野県町村誌』(東信編)に「塚穴」の名称で紹介されたのが初見であり、大正12年には唐沢貞次郎氏による報告が出されている(『古墳』『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1卷)。昭和9年には八幡一郎氏による測量調査が行われており(『北佐久郡の考古学的調査』)、昭和59年には筑波大学による調査も実施されている(『千曲川上流域における古墳の実測調査』『信濃』第36巻第11号)。

耳取大塚古墳はいたるところに削平の痕跡が見られるものの、現存する市内の古墳の中でも最大の円墳である。墳丘は径25m、比高5.85mを測る。石室は横穴式石室で墳丘の中腹部に造られており、南北に向って開口している。石室の長さは玄室が4.3m、羨道が2.75m、幅は開口部で1.4m。玄室の入り付近で2.38m、奥壁で2.98m、比高は開口部で1m、奥壁で2.35mを測る(以上の数値は筑波大学の調査による)。

明治時代には石室が開口していたと見られ、副葬品は不明だが、石室の構造等から築造年代は七世紀前半と考えられている。石材のほとんどが多孔質集塊岩で、玄室の構造について佐久市の家地頭1号墳との類似性が指摘されている。

耳取大塚古墳は昭和45年3月31日に市重文化財に指定された。古墳はJR小海線美里駅で下車し、2kmほど西へ進んだ場所にある。現在、石室内へは自由に出入りすることができ、進元の人々に「塚穴」と呼ばれ、親しまれている。

(高橋陽一)



石室の内部

古
墳



あがた 県 遺 跡 (軽井沢町)

県遺跡は、軽井沢町大字長倉の鳥井原に所在する。昭和51年に同道18号線バイパス建設に先立ち、調査が行われ、古墳時代前期の堅穴住居跡2軒が発見された。また平成5年には北陸新幹線建設に伴う調査も実施され、ここでも古墳時代前期の堅穴住居跡1軒が確認された。これら2次にわたる調査により、今まで人間の生活の痕跡が乏しかった標高約935mのこの地に、古墳時代前期の小規模集落が形成されていたことが判明した。ただしこの集落は短期間しか存続せず、集落廃絶後はまったく人間の活動の痕跡がみられない場所となっていた。

遺物には、平成5年に調査された堅穴住居跡から在来系土器に混じって関東系上器および北陸系土器という搬入土器が出土している。古墳時代前期という時期に外來系土器を伴って形成された小集落であることは、古東山道推定ルートに近いことなどともあわせ、政治的な色合いを強く感じさせる遺跡といえよう。

写真は、平成5年調査の堅穴住居跡の土層断面である。土層中位には軽石層が20cmほど堆積しているが、

これは浅間山の天仁元年（1108）の噴火の際に降下した浅間Bテフラ（降下火山灰）である。このテフラは昭和51年調査の堅穴住居跡でも認められたが、浅間山のテフラが確認されるのは佐久地方では本遺跡のみである。なお、この浅間Bテフラの堆積が住居覆土の中位にあることは、12世紀になってもこの堅穴住居跡は完全には埋まりきっていないことを示しており、自然埋没には長い年月が必要であることが知られる。

遺跡はしなの鉄道中軽井沢駅より車で10分、出土品は長野県立歴史館（☎026-274-2000）などに保管されている。

（桜井秀雄）



平成5年調査の堅穴住居跡



あまざかいとうげ 雨境峠祭祀遺跡群（立科町）

雨境峠祭祀遺跡群は、立科町芦田八ヶ野地区の白樺湖へ向かう県道諏訪白樺湖小諸線沿いに点在する。古墳時代に比定される鳴石遺跡・勾玉原遺跡・赤沼平遺跡・鳴石原遺跡・鍵引石遺跡・池ノ平遺跡・御座岩遺跡の7遺跡と中世に位置づけられる法印塚・中うね塚・与懸塚の石塚および賽ノ河原遺跡からなる祭祀遺跡群である。

なかでも鳴石遺跡と勾玉原遺跡は古墳時代の神祭祀遺跡として昭和初期から知られており、勾玉原遺跡ではかつては石製模造品が一日に弁当箱1杯分も採集されたという。昭和41年には桐原健氏による詳細な踏査が、また平成5年には立科町教育委員会による発掘調査が実施されている。

写真は、鳴石遺跡の「鳴石」と呼ばれる鏡餅状に重なった2個の巨石である。上石と下石は別の石を重ねたものであり、若干の空間があるため叩くと音がするのが名前の由来である。神を招き寄せる磐座（いわくら）と考えられる。上石は235×218cm、下石は306×296cmをはかる。この鳴石の周囲には方形の集石造構

がみられ、また北西10mほど離れたところにも小さな巨石と集石造構が認められている。

なお、こうした古墳時代の神祭祀遺跡、つまり神坂峠（阿智村）—雨境峠—瓜生坂（旧望月町）—入山峠（軽井沢町）を結ぶルートは大場都雄氏により古東山道として命名されており、人和政権の東国進出の重要経路となっていたことが指摘されている。

遺跡はしなの鉄道小諸駅より車で40分、個人蔵の出土品の一部は上田市立国分寺資料館（0268-27-8706）、長和町原始古代ロマン体験館（0268-68-4339）で見学できる。

（桜井秀雄）



与懸塚（中世の石塚）

古
墳



おおにわ 大庭遺跡（立科町）

大庭遺跡は、立科町大字芦田に所在し、芦田川が形成した沖積台地に立地する。芦田川に沿って南北に伸びる立科町最大規模をはかる古町遺跡群の中心的遺跡である。また対岸の芦田川右岸には中世の芦田城址がみられる。

明治時代から知られた遺跡であるが、平成元年に園場整備に先立ち立科町教育委員会により発掘調査が行なわれ、縄文時代と古代（古墳時代末期～平安時代）の集落遺跡であることがわかった。縄文時代では前期中葉2軒・中期初頭1軒・中期中葉～後葉13軒の竪穴住居跡と土坑85基が、また古代では18軒の竪穴住居跡と掘立柱建物跡1棟がそれぞれ発見された。縄文中期後葉の11軒住居跡は環状集落を形成し、内側には墓坑と思われる土坑が存在している。また古代の竪穴住居跡は、古墳時代末期～奈良時代初頭と奈良時代末～平安時代初頭の2つの時期に大別される。

遺物は、縄文時代では土器・石器に加えて骨片や柱材が出土し、なかでも中期中葉の焼町土器や中期後葉の土器に良好な資料がみられる。古代では土師器（壺・

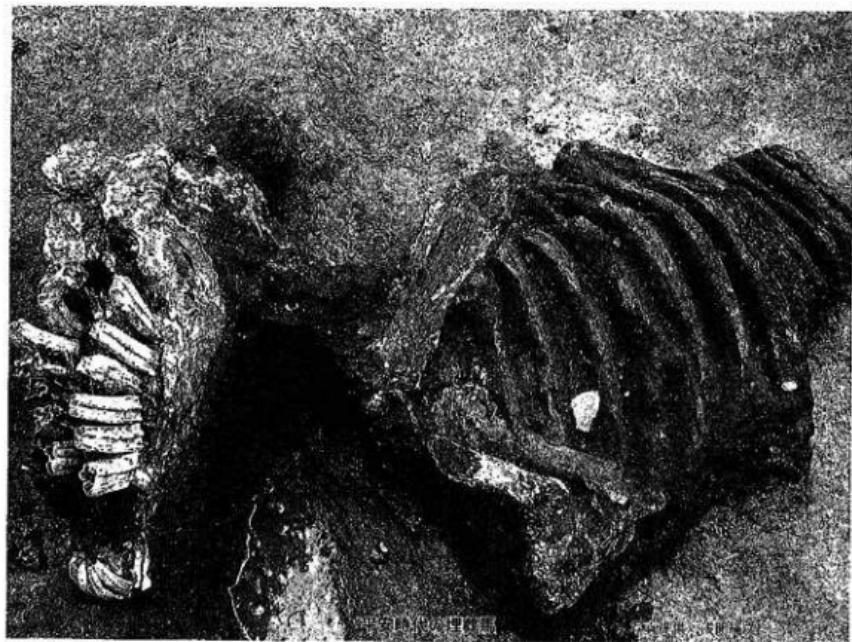
壺・瓶等）、須恵器（壺・蓋・壺等）が多量に出土し、柱材の残存も認められる。遺構・遺物とも、発掘調査事例の少ない立科町において貴重な資料を提供してくれる遺跡である。

遺跡は平成3年に史跡公園として整備されている。写真は、現地に復元された古代の竪穴住居跡と掘立柱建物（高床式倉庫）である。竪穴住居は一込5.3mの方形を呈し、掘立柱建物は7×4.8mの総柱で31.65mの広さをもつものである。

遺跡はしなの鉄道小諸駅より車で30分、出上品は、立科町教育委員会が保管する。 （桜井秀雄）



整備された史跡公園



のびつけ 野火付遺跡（御代田町）

1980年代中ごろ、佐久市・小諸市・御代田町にまたがる小田井・御影地区で大規模な調査が計画された。それに先立つ分布調査で、この地区に奈良・平安時代の大集落が埋もれていることが明らかになり、鎌ヶ原遺跡群と命名されることになった。

その遺跡群調査の皮切りとなったのが昭和59（1984）年の御代田町野火付遺跡の発掘調査である。

雄大な浅間を仰ぎ見る野火付遺跡からは、予想通り奈良・平安時代のムラが姿を現し、奈良時代の住居跡7軒、平安時代の住居跡9軒がみつかった。さらに、その隣接地には平安時代の馬頭が埋葬されていた。

一緒に出土した土器から、これらの馬は9世紀初頭のもので、当時1頭ずつ丁寧に埋葬されたものであることがわかった。馬は木曾馬程度の中形馬で、いまのサラブレッドのよう大きな体格ではなかったらしい。

奈良時代から平安時代にかけてこの地域の歴史的環境をひも解くと、この地域には御牧である塩野牧や長倉牧がおかれて、官道の東山道が通過し、御代田から軽井沢のいずれかの場所に長倉駅が設置され、駅馬15

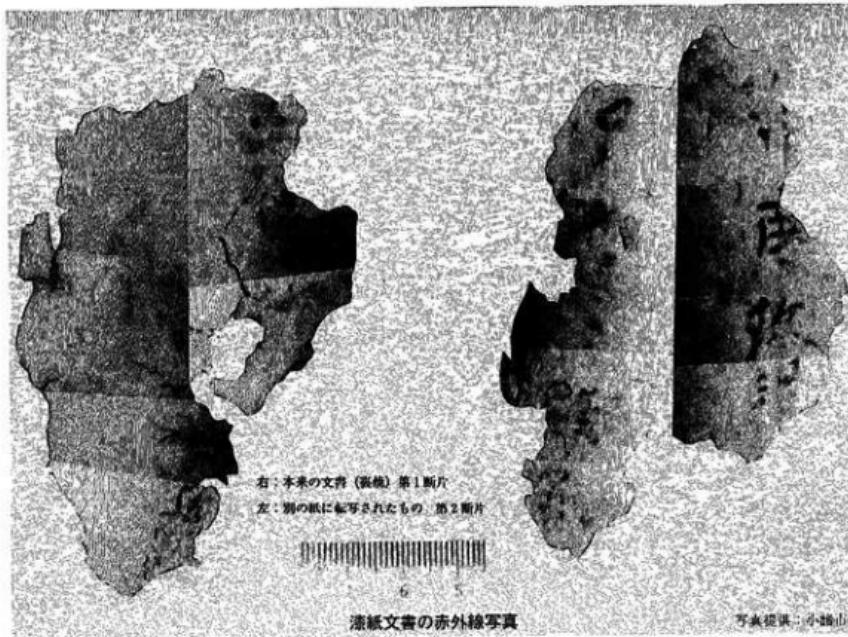
頭がおかれていたものと考えられる。長倉駅については、鎌ヶ原遺跡群近辺にあったという説と、碓氷峠に近い軽井沢地蔵にあったという説があるが、駅そのものが発見されていないため、決着をみない。

たとえば、現在の御代田町塩野は、塩野牧に由来する地名と考えられるし、馬瀬口はかつて横口と書き、牧場の入り口をさす地名と考えられ、塩野牧の玄関口であったものとみられる。

野火付の古代埋葬馬は、塩野牧の牧馬か、東山道長倉駅の駅馬であった可能性が高い。馬頭は現在、御代田町の有形文化財に指定されている。（堤 雄）



空から見た野火付遺跡



右：本来の文書（高級）第1断片
左：別の紙に転写されたもの。第2断片

漆紙文書の赤外線写真

写真提供：小諸市

たけのはな 竹花遺跡（小諸市）

竹花遺跡は、小諸市御影新田字竹花に所在し、宮ノ反A遺跡群に含まれる。佐久平北部に特徴的な田切地形の標高約720mの台地上に立地する。

国道141号線バイパス建設と交番建設に先立ち、平成2・3・5年に発掘調査が行われ、あわせて古墳時代前期～平安時代の堅穴住居跡118軒、掘立柱建物跡88棟などがみつかった。

遺物は豊富で、しかも注目すべきものがいくつも出土している。古墳時代後期の堅穴住居跡からは鈴鏡を模した土製六鉢鏡がカマド脇から出土している。これは県内初の発見であり、全国的にも数例しか出た例がないものである。

また奈良時代の土坑からは、黒色土器内にはいった状態で漆紙文書が発見された。この漆紙文書は壊状の土器に入れた漆のふた紙として麻糬されたものである。

写真は、その漆紙文書である。「□布度次段□□□□飯依」という文字が書かれており、物品のやりとりに関わるものと考えられている。漆紙文書の出土は県内でもいまだ数例にすぎない貴重なものである。

文字資料としては他にも、須恵器円面鏡3点や土器片を再利用した転用鏡がみられ、また墨書き土器が75点と多量に出土しており、その豊富な出土量がわかる。とりわけ、9世紀前半の堅穴住居跡から出土した「大井」と書かれた墨書き土器は、古代の大井郷を示すと考えられる。これは本遺跡の所在する御影新田周辺が、大井郷に比定される説が有力であることからも大変興味深い資料となる。この他、出土例の少ない皇朝十二銭の富寿神宝（811年铸造）も1点みつかっている。

遺跡は、しなの鉄道小諸駅より車で15分、出土品は小諸市立郷土博物館で見学できる。（桜井秀雄）



漆紙文書と入っていた壺形土器



みやのそり 宮ノ反A遺跡群（小諸市）

宮ノ反A遺跡群は、小諸市御影新田に位置し、鉄師屋遺跡群に近接する。上信越自動車道建設に先立ち、平成5年に発掘調査が行われた。

遺構には古代（6世紀後葉～8世紀前半・9世紀）および中世（13～15世紀）のものがみつかっており、古代では91軒の堅穴住居跡と78棟の掘立柱建物跡および新田2時期の官衙跡が発見された。

6世紀後葉から形成され始めたこの古代集落に官衙跡が出現する。7世紀末頃のことである。これは幅約1.5mの溝によって方形に区画されたもので、南北長約53mをはかる。東西長は不明だが東西に長い屋敷地が想定され、内部には主屋および倉庫と想定される2×3間の掘立柱建物跡が数棟存在している。

続く8世紀前半になると、造り替えが行なわれ、規模を拡大した新しい官衙跡が登場する。溝による方形区画の南北長は約60mと伸び、さらに南側にはもう1条の区画溝が東西に設けられる。内部の主屋および脇屋も3×6間と大きいものとなり、また倉庫の数も増加する。他にも竪壁跡や入口部の門状施設なども確認

されている。

こうした官衙跡の発見は佐久地方では初めての発見例であるが、遺物には特徴的なものは全くみられないため、都鄙と認定するには判断材料にやや乏しい。他には郡の下部にある郷衙、あるいは隣接する鉄師屋遺跡群が東山道長倉駅の有力な推定地であることから駅家およびその関連施設、または居館などといった可能性があげられるが、いまだ解決をみない。

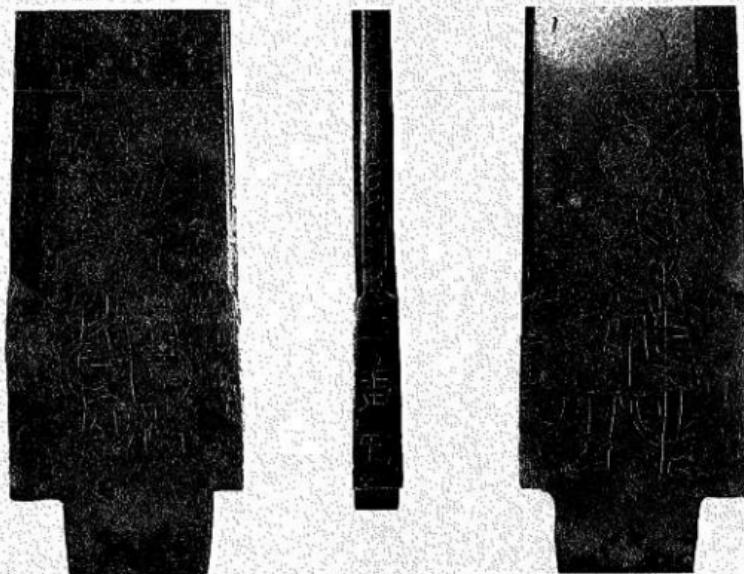
遺跡はしなの鉄道御代田駅より車で5分、出土品は長野県立歴史館で保管される。

（桜井秀雄）



遺跡から浅間を望む

奈良・平安



三寅劍の象嵌

写真提供：小海町

三寅劍 (小海町)

国宝級の逸品であるこの剣は、その峯の部分に「三寅劍」と鉤が刻んである。災いから身を守るために、寅年、寅月、寅日に作られた護身用の剣であるという。全長は34.5cm、刃わたり25.4cm、重畠は152gの剣である。

昭和13年、名だたる金工研究家の香取秀真がこの剣をみて飛鳥時代のものとの推定されたと伝わるが、その後この剣は、人々の記憶から流れかかっていた。

ふたたびスポットライトがあたるようになったのは、当時奈良大学学長であった考古学者水野正好氏が見出した平成になってからのことである。この剣は、対象13年に研がれ、その象嵌が見えなくなっていたが、水野氏は金糸・銀糸によるその象嵌を見落とすことはなかった。その象嵌は、タガネ彫りの溝に、金糸・銀糸を置いて打ち込み、磨いて完成する手法による。

まず、佩表の象嵌では、天部立像として、左手に鉢を持った多聞天（毘沙門天）と星座（三公・三台・北斗七星）がみえる。

佩裏の象嵌では、天部立像として、右手に矢を持つ持國天と梵字（9字で構成されるが解説不能）がみら

れる。

「寅」「劍」の文字の特徴、三公・三台・北斗七星の星座の存在が7～8世紀的な特徴を示し、おおむね奈良時代の剣とみてよいといふ。

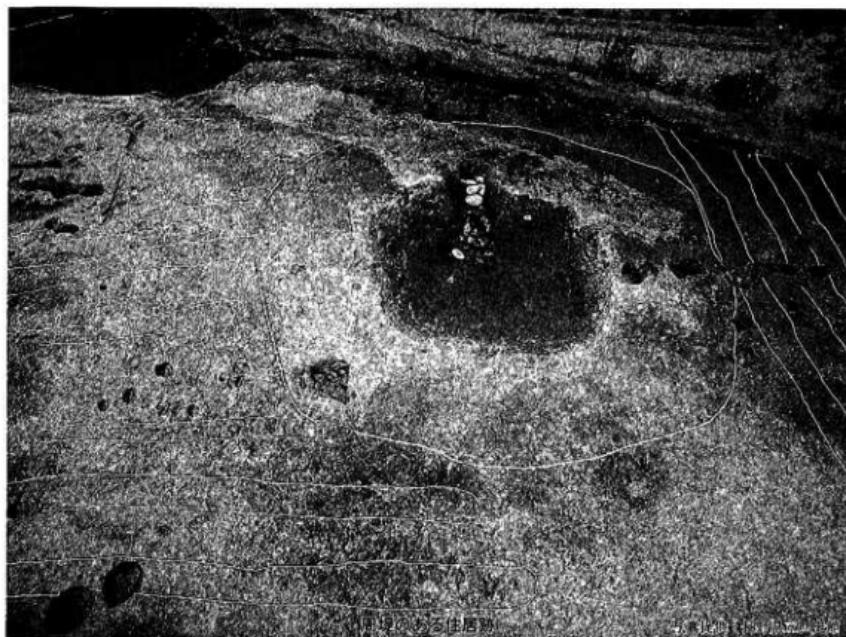
日本古代の剣で刀剣飾を象嵌したのは、奈良県石上神宮の「七支刀」意外なく、その意味でもわが国の重要な古代の剣といえる。

三寅劍は、小海の嵐山理介氏が所有する。寸分違わない精巧な複製は、松原湖畔の小海町国際交流センターで展示されている。

（堤 隆）



象嵌の模式図



周堤のある住居跡

すなはら 砂原遺跡（佐久市）

砂原遺跡は、佐久市（旧浅科村）塩名田の千曲川右岸の第1段丘上に営まれた遺跡である。現在、遺跡の中心部には北陸新幹線が通っている。

本遺跡は千曲川の洪水により堆積した最厚で2mを超える砂層に覆われており、「砂原」という地名にもうなづける。発掘調査は過去2回実施されている。浅科村教育委員会が行なった農協庁舎建設に先立つ、平成4年の調査では古墳時代～奈良平安時代の堅穴住居跡6軒等が発見され、旧浅科村では初の集落遺跡の調査となった。

平成6年には北陸新幹線建設に伴う調査が県埋文センターによって行なわれ、古墳時代～平安時代の堅穴住居跡37軒・掘立柱建物跡3棟・水田跡・畑跡などが発見された。他にも绳文中期土器片の出土や人骨を伴う近世墓5基の検出もみている。砂層に覆われていたのは水田跡・畑跡と9世紀後半の堅穴住居跡1軒であり、水田跡・畑跡の下からは古墳時代前期～平安時代初期の堅穴住居跡等が検出されている。

写真は、平成6年調査分の砂層に覆われた堅穴住居

跡である。砂層の厚い堆積によって周堤が削平されることなく残っていた大変珍しい事例である。この周堤は幅1.5m前後を測り、高さは最大で20cmを有している。住居廃絶の直後に洪水に襲われたものと考えられる。本住居跡は出土土器から9世紀末に比定されており、したがってこれを覆う洪水砂層は、日本紀略などに記録が残る仁和4年（888年）に起きた仁和の洪水によるものである可能性が高い。

遺跡はしなの鉄道小諸駅より車で15分、出土品の多くは、長野県立歴史館（☎026-274-2000）に保管されている。
(桜井秀雄)



周堤のある住居跡のカマド

ひじりはら 聖原遺跡（佐久市）

1989年から足かけ7年、延べ約10万m²にも調査がおよんだ聖原遺跡は、佐久市北部の長十呂地蔵、浅間山南麓の南西にのびる田切地形の台地上にある。発掘後は、佐久市流通業務団地が造成された。

聖原では、台地全面にわたり、総数818棟の堅穴住居跡、869棟の掘立柱建物跡、370基の土壙、粘土採掘坑、溝址が調査された。時代的には、古墳時代後期6世紀から平安時代末の11世紀代の集落遺跡である。中心は奈良～平安時代の前半の住居で最も多い。

出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・白磁・石器・鐵製品・銅製品がある。中でも「和銅開珎」「神功開寶」「隆平永寶」「富壽神寶」「承和昌寶」「長年大寶」の皇朝十二錢、腰帶金具・八棱鏡、馬鎧・金劍模・鉄鎧・銅鏡・円面鏡、9世紀前半と見られる瓦塔は希少・屋蓋・九輪などの希少なものがある。

写真は仏鉢形の中斐型土器で、暗文の手法により、文字が書かれている。内面は「佛」、外面に「甲斐國山梨郡大野郷戸口」「乙作八千」「此後□佛□為」とあり、9世紀前半の住居跡より出土。大野郷は今の山梨

市である。聖原遺跡に僧また寺と関係し、甲斐とつながる人物がいたことがわかる。

8世紀後半の方3.5cmの石製印「伯万私印」は住居址より出土し、「伯」氏という印を持つ豪族の存在を物語るものである。多くの墨書・刻書七器の中には「寺」「於寺」がある。

聖原の調査は、東国の大古代集落の解明にむけ、遺構・遺物とともに膨大な史料を残した。

遺跡は上信越新幹線佐久平駅北東に車で5分、関越自動車道佐久インターの北に隣接する。遺物は佐久市教育委員会が管理している。
(森泉かよ子)



伯万私印

8世紀佐久市出土
石製印
「伯万私印」



かない 金井城跡 (佐久市)

金井城跡は1988年以降何度かの調査で、主郭を除くほぼ全面が発掘され、内部構造が明らかになっている。

小山井宿南方にあり、現在は小田井工場団地となっている。城は3方が断崖に囲まれた突出した台地、自然の要害に構えており、西方の主郭を要として、扇状の広がりを見せ、総面積20haを超えると考えられる巨大城郭である。主郭を基点にパームクーヘン状に空堀を刻み、二郭、三郭、外郭を構成している。また、主郭から三郭の北方には北郭が存在している。

主郭は未発掘のため、構造が明らかでないが、二・三・北郭は堅穴と掘立柱の建物が共存して林立している。堅穴建物跡は倉庫あるいは兵隊の臨時の宿泊所として使用されたと考えられる。掘立柱建物は極めて貧弱な角材を使用して建築されており、堅牢な建物であったとは考えがたい。こういった遺構のあり様からみて、金井城は臨時的な施設が多い城であったということができる。

遺物は、内耳十鉄・土師質土器皿、石臼などの生活用品が出土しているが、広大な城跡に比して量は少なく、生活臭が薄い。臨時的な施設が多い遺構のあり方と

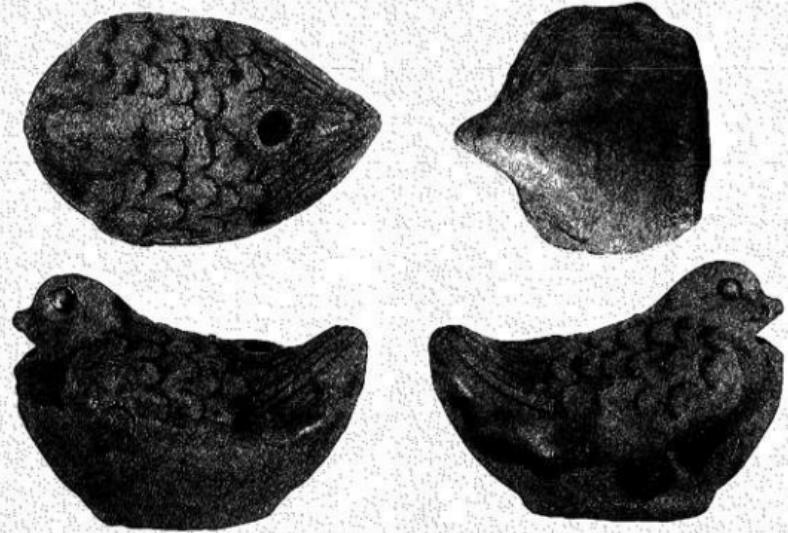
関係しているように思われる。茶臼や天目茶碗のような嗜好品もあるほか、武器の手入れに使用したと考えられる携帯用の砥石が多く出土するなど戦闘に備えた城郭ならではの遺物の出土状況も確認できる。

佐久平は天文9年（1540）武田信虎の佐久郡侵攻作戦開始以降、「乱入度なし。國中壇の如くわかつて鬭争やむ時なし」の状況に陥る。天文12年（1543）の武田信玄の侵略時には、佐久郡内で小山井城主尾賀又六郎だけが従わず、決戦して滅ぼしている。金井城が臨時的な城として急激に膨張していったのは、尾台氏滅亡以降であった可能性が高い。

（小山岳夫）



三郭の遺構群



水鳥の水滴

写真提供：佐久市

しもしなのいし 下信濃石遺跡（佐久市）

下信濃石遺跡は、佐久市岩村田山田付近にあり、湯川右岸、岩村田台地の東傾斜面地にある。花岡土地区画整理の道路用地で、台地上の標高700m、遺跡内の傾斜はきつく、低地とは5m以上の標高差がある。

西の台地上の「縁下平」（はげのたいら）地蔵は、中世創建当初の「龍雲寺」伝承地である。龍雲寺は400m程北の大井城跡の城主大井氏が正中年間（1324～1326）に建てた釋教寺の寺である。文明16年（1484）村上氏に攻められ大井城陥落の際、「龍雲寺大破」の記録がある。明応3年（1494）、今の岩村田市街地の北に移り、中世末には武田氏が厚く帰依した寺である。

調査区中央の23.2×8.4mの大きな平坦地は寺院用地と推定され、斜面を大きく削平して大壇とし、平坦地端部は石を積み整地する。石積の下方は水により池状である。平坦面には石で囲う基壇、石積の井戸、土坑、柱穴があり、基壇上面は灰・炭化物層が覆う。基壇前は蔽きの床となっており、柱穴もわずかにあり何らかの建物があったことがわかる。

小規模な平坦地は斜面間に壁をもつ堅穴状建物跡で

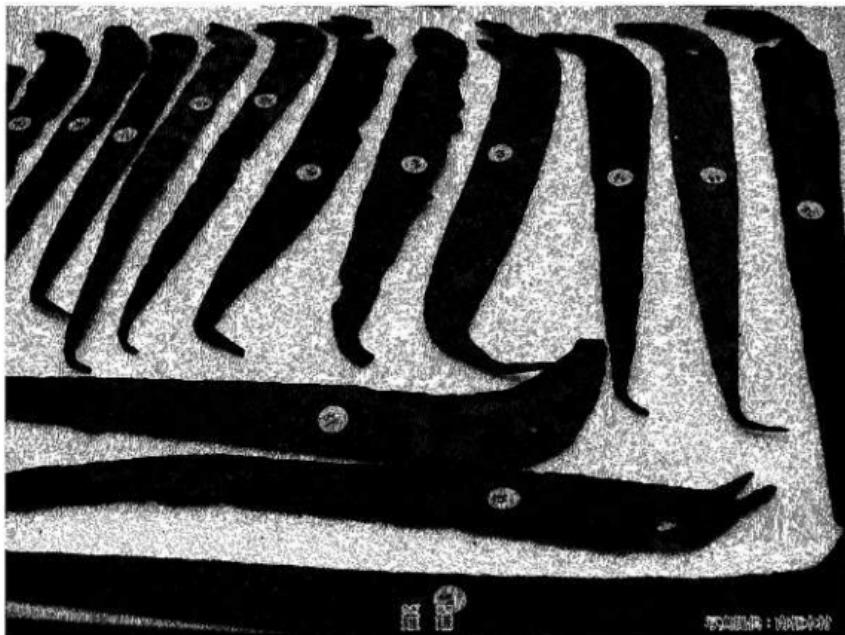
10棟あり、床はタタキ、火廻と柱穴を設ける。最大の11m近いTa3号跡は土坑、ピット、石組がある。石組裏から古漁戸水滴が出て来る。

遺物はカワラケ・内耳・常滑・珠洲・古瀬戸・白磁・青磁・青白磁・青銅製品・鉄製の刀子・釣・波来鏡・硯・五輪塔がある。舶載品は11世紀後半～13世紀前半、国产品は13世紀前半～14世紀前半、カワラケ・内耳は15世紀頃である。水滴や硯、青磁の仏花瓶など寺院関連のものであろう。写真の古漁戸水滴は南北朝14世紀代のもので、全長4cm高さ4cmの水鳥形である。

遺跡は岩村田小学校の北東にあたる。（森泉かよ子）



下信濃遺跡の石垣



御陵山の祠

おみはかやま 御陵山（南相木村・川上村）

南相木村と川上村の境に位置する御陵山。この山頂よりやや北側、標高1,824mの尾根上に小さな祠がある。『川上村誌 民俗編』の記述に興味を抱いた信藤祐仁氏は、2003年現地を調査。そこには薙錆はじめ、約800点の鉄製模造品が収められていた。

その後鉄製品はクリーニング処理され、実測図もおこされている。内訳は薙錆112点、剣形458点、刀形150点、弓形19点、矢形5点、容器形44点、容器形底部の円板30点、その他釘8点、鏺1点、古銭2点、鈴1点、鏡形1点、不明鉄製品1点、木製剣形1点の計833点に及ぶ。また記録によればこの他にもさらに鏡などが収めてあつたらしい。

この内薙錆の112点という数は、1ヶ所での発見例としては異例の多さであろう。いずれも源氏大社配布の人型品ではない小型のもので、おおよそ15世紀から19世紀のものと考えられている。

御陵山は川上村側からも南相木村側からも、雨乞いの神事が行われていた。しかし川上側では特別に年中行事は等は行われていなかったようである。これに対

し、南相木村の特に三川集落を中心とした地域では信仰の対象にしており、山の神を祀るなど、様々な祭事が執り行われていた。源氏神社の象徴とも言える薙錆と、地元の雨乞い行事の関係性はきわめて興味深いものである。

現在鉄製品は南相木村教育委員会により保管され、南相木村公民館（図書館）で一部展示されている。

また祠は南相木村三川集落建立と伝えられ、高さ約1.2mの木製であるが、トタンも用いられ昭和期のものとも考えられる。両村をまたぐ馬越峠から、徒歩約2時間の山中にある。
(藤森英二)



御陵山の祠



小諸市郷土博物館



北相木考古博物館



浅間縄文ミュージアム



南牧村美術民俗資料館

佐久の博物館と資料館

■ 軽井沢町歴史民俗資料館

茂沢南石堂、入山跡祭遺跡の資料などがある。

☎0267-42-6334 休館日：月曜日、祝日の翌日

■ 浅間縄文ミュージアム

浅間山麓の縄文時代と浅間火山が富設テーマ展示。国重文の焼町土器の展示は圧巻。縄文体験も當時できる。

☎0267-32-8922 休館日：月曜日、祝日の翌日

■ 小諸市郷土博物館

石神・久保田・錦町屋遺跡など小諸市内の考古資料を展示。横古内にあり、佐久地方古参の博物館。

☎0267-22-0913 休館日：12～1月の水曜日

■ 北相木考古博物館

楊原岩陰の出土品を常設展示。とくに骨角器の精巧さにはため息がもれる。発掘状況のジオラマも圧巻。

☎0267-77-2111 休館日：月曜日、祝日の翌日

■ 佐久市望月歴史民俗資料館

平石縄文遺跡をはじめ平安時代までの望月地区の考古資料が充実。佛教當主富士氏の音声解説が普話的。

☎0267-54-2112 休館日：月曜日、祝日の翌日

■ 佐久市文化財課

過去半世紀にわたる佐久市域の重要な発掘品を保管。北西の久保の猿輪は圧巻。寄山の縄文土器、東一小楠古墳の杏葉なども見られる。見学には連絡が必要。

☎0267-68-7321 休館日：土・日曜日、祝日

■ 佐久市白田文化センター

白山地区的考古資料を展示。物部猪九の私印（複製）、入沢夜平遺跡の出土遺物などが展示される。

☎0267-82-3634 休館日：土・日曜日、祝日

■ 川上村文化センター

本漆表紙の人面香炉形土器など大深山遺跡の出土遺物を展示。故山井明氏採集の馬場半遺跡の石棺など旧石器、民俗資料の展示もある。

☎0267-97-2000 休館日：月曜日、祝日の翌日

■ 南牧村美術民俗資料館

矢出川遺跡の縄石刀文化資料を展示。故上屋忠芳氏が水年採集したもの。柏垂遺跡の旧石器やナウマンゾウの臼齒などもある。

☎0267-98-3288 休館日：月曜日、祝日の翌日



佐宮司遺跡の弥生時代装飾品

写真：一井良輔 撮影：小川忠男

佐久考古通信 No.99・100記念号

執筆：桜井秀雄、藤森英二、長崎治、小山岳夫、堤 隆、
森泉かよ子、富沢一明、高橋陽一、望月博史

編集：堤 隆
会長：藤沢平治

発行：佐久考古学会（事務局長：桜井秀雄）
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6 桜井方

発行日：2007年10月10日

ホームページ <http://w2.avis.ne.jp/~sakukoko/>